農村総合整備事業

—緊急発掘調査報告—

砂場B遺跡

1978

伊那市教育委員会

農村総合整備事業

—緊急発掘調査報告—

砂場B遺跡

1978

伊那市教育委員会

序

昭和51年に伊那市手良中坪地区内でのパイロット事業（一般的に農村総合整備事業）が計画されました。

手良地区が歴史上に登場するのは、平安時代承平５年（935年）倭名類聚鈔に手良郷がみられる。手良の地名は手良公と称する帰化人が居住していたと伝えられており、それを裏付けできるような大百済毛、小百済毛と呼ばれている地名が残っている。当砂場遺跡は前述した二地名の近くに所在しており、分布調査により時代的に一致する遺跡と考えられていた。

この遺跡の保存について、文化財保護法に基づき、関連した公共機関との協議がなされ、工事着工以前に発掘調査をして、記録保存という措置がとられました。この事業は、当委員会に委託されることになりましたので、早速調査委員会を結成して協議しましたところ団長に友野良一先生を、調査員には地元の上伊那考古学会の先生方をお願いすることにしました。

調査は９月中旬から10月上旬にかけて行なわれ、地元の大勢の方々の御協力によって計画通り、全調査を終了することができました。

この結果は手良郷に関連する住居址、遺物等が出土し、当地区の文化財保存事業として画期的な成果をおさめ得たことは、誠によろこびに堪えない次第であります。

終始、この発掘に御協力、御援助下さった長野県教育委員会、長土連、団長友野良一先生、各調査員、考古学会員の方々、地元手良土地改良事務所の皆様に深甚の謝意を捧げる次第であります。

最後に、この報告書が今後の研究に貢献できますよう期待する次第であります。

昭和53年３月３日

伊那市教育委員会

教育長　伊 沢 一 雄

凡　　例

1．　今回の発掘調査は農村総合整備事業に伴なう、土地改良事業で、第1次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2．　この調査は、農村総合整備事業に伴なう緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県土地改良事業団体連合会の委託により、伊那市教育委員会が実施した。

3．　本調査は、昭和52年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．　本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美、　田畑辰雄、

◎図版作製者

◎遺構および地形

友野良一、飯塚政美、田畑辰雄

◎土器及び石器実測図

田畑辰雄

◎写真撮影

◎発掘及び遺構

友野良一、飯塚政美、田畑辰雄

5．　本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　遺　　構……（1～12）

第1節　住居址……（1～11）
第2節　特殊遺構……（12）
第3節　配石址……（12）

第Ⅱ章　遺　　物……（13～22）

第1節　住居址出土遺物……（13～22）

第1項　第1号住居址……（13～14）
第2項　第2号住居址……（14～16）
第3項　第3号住居址……（16）
第4項　第4号住居址……（16）
第5項　第5号住居址……（17～19）
第6項　第6号住居址……（19）
第7項　第7号住居址……（19～20）
第8項　第8号住居址……（21～22）

第2節　特殊遺構出土遺物……（22）

第Ⅲ章　ま　と　め……（23～25）

目　　次

挿　図　目　次

第１図　遺構配置図……（１）
第２図　土層図（１）南北……（２）
第３図　土層図（２）東西……（２）
第４図　土層図（３）東西……（２）
第５図　第１・３号住居址実測図……（３）
第６図　第１号住居址カマド実測図……（４）
第７図　第３号住居址カマド実測図……（４）
第８図　第２・４号住居址実測図……（５）
第９図　第２号住居址カマド実測図……（５）
第10図　第４号住居址埋甕炉断面図……（６）
第11図　第５号住居址実測図……（７）
第12図　第５号住居址カマド実測図……（７）
第13図　第６号住居址実測図……（９）
第14図　第７号住居址実測図……（10）
第15図　第７号住居址カマド実測図……（10）
第16図　第８号住居址実測図……（11）
第17図　第８号住居址埋甕炉断面図……（11）
第18図　特殊遺構・第１号配石址実測図……（12）
第19図　第１号住居址出土遺物……（13）
第20図　第２号住居址出土遺物……（15）
第21図　第４号住居址出土遺物……（16）
第22図　第５号住居址出土遺物……（18）
第23図　第５号住居址出土遺物……（19）
第24図　第６号住居址出土遺物……（20）
第25図　第７号住居址出土遺物……（20）
第26図　第８号住居址出土遺物……（21）
第27図　第８号住居址出土遺物……（21）
第28図　特殊遺構出土遺物……（22）

目　　次

図　版　目　次

図版 1　遺跡全景
図版 2　遺　　構
図版 3　遺　　構
図版 4　遺　　構
図版 5　遺　　構
図版 6　遺　　構
図版 7　遺　　構
図版 8　遺　　構
図版 9　遺物出土状況
図版10　遺物出土状況

第Ⅰ章　遺　　構

当遺跡において検出された遺構は、竪穴住居址８軒、特殊遺構１基、配石址１基である。竪穴住居址は弥生時代後期のもの２軒と、他はすべて土師器を出土するものであった。竪穴住居址は他にも多くの存在が推測されるが、調査地区外の畑であったり、排土場所の確保等２理由から調査は行なわなかった。特殊遺構は土師器を出土するものであり、配石址は時期不明であった。

また、当遺跡の遺構の密度はかなり高く、遺構の重複もかなりの数認められたのではあるが、その上層のものは、耕作等の諸条件がかなり加っており、そのための破壊がいちぢるしく、確認のみにとどめ、ここではふれないことにした。なお壁高は現存壁高（床面よりの高さ）を示し、住居址内の土層の堆積は他にも普遍的にみられる状態と大差なく、これを省略した。

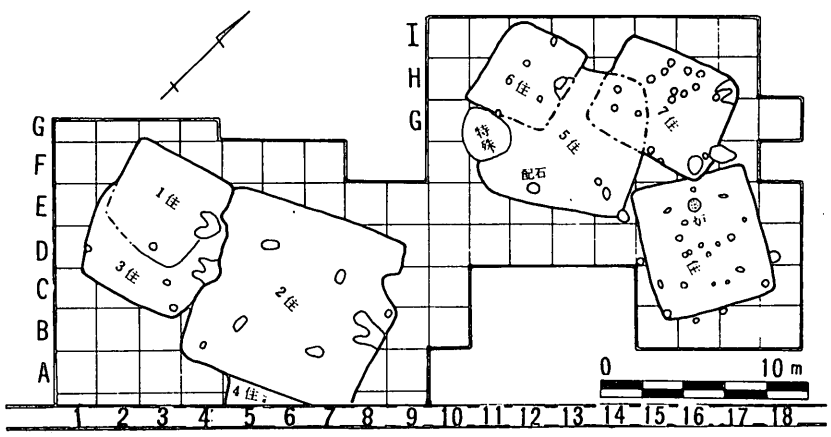
遺跡の層序は、おおむねⅠ～Ⅵ層にわたって堆積していることが確認され、この層序はほぼ今回の調査のおよんだ区域に共通する。“砂場”という小字名が示すように　、すべての層が砂質土であり、南東の方向に厚く堆積している。また、調査区内の現状は畑地であり、長芋等の耕作によってかなりの深層にまで撹乱が及んでいた。なお遺物出土の状態等は後章でこれを記載した。

第１節　住　居　址

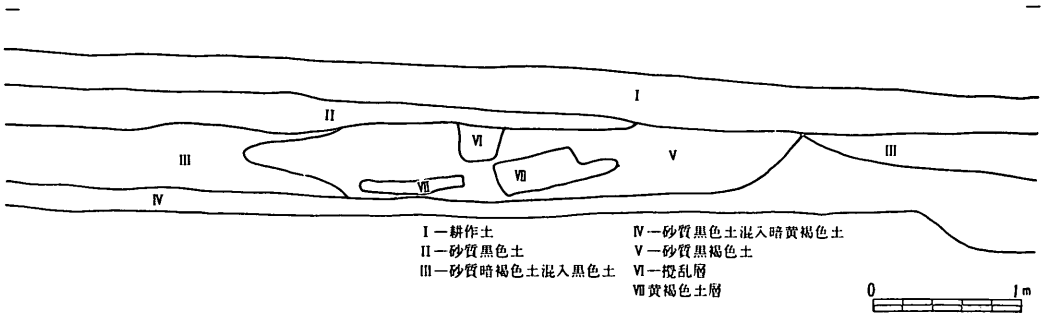
第１号住居址　（第５～６図、図版２・５）

本住居址は調査区内南西隅にあり、E－３のグリットを中心に、D－２～３、E－２～５、F２～４、G－３にかかって存在している。住居址平面プランは隅丸長方形を呈する竪穴住居址でありその規模は、東西軸が長く5.10m×南北軸4.60mを測る。主軸方向はN75°Eを示す。

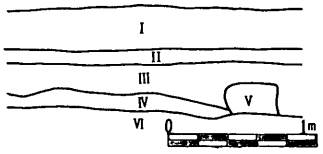
第Ⅲ層にあたる砂質暗褐色土混入黒色土が、ローム層を掘り込んで落込んでいる。住居址南スミの床面および、東～南にかけての壁の確認は明瞭にはできなかった。床面はおおむね平坦であり、南東の一部分をのぞき固いタタキの良好な状態であった。壁高は、東25cm、西35cm、北42cmを測り南壁は第3号住居址との切り合う関係



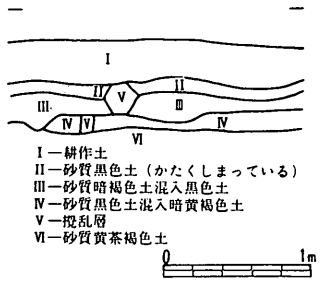
第１図　遺構配置図



第2図　土層図　1　(南　北)



第3図　土層図　2　(東西)(名称は第3図と同じ)



第4図　土層図　3　(東西)

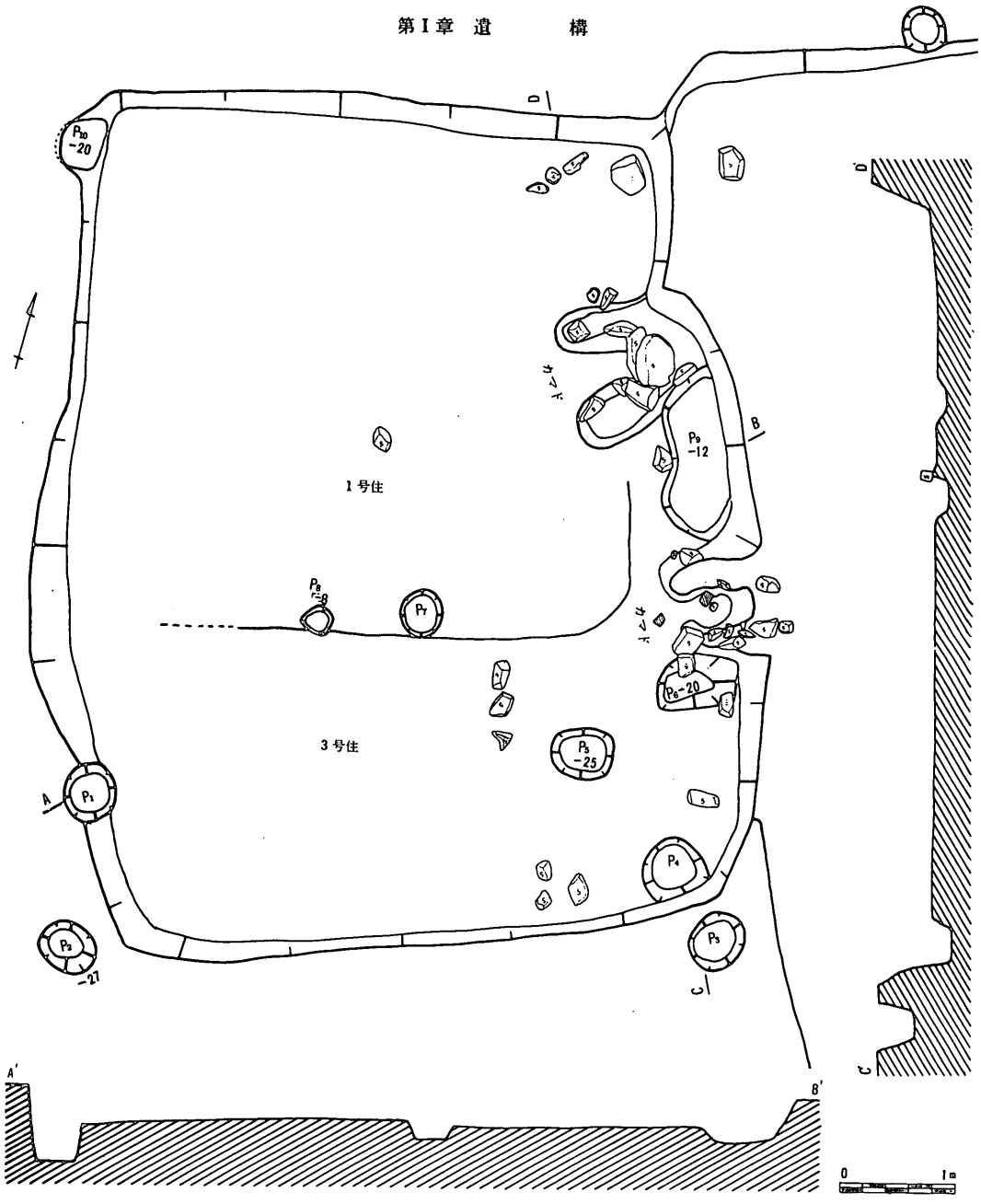
から測定不可能であった。カマドは東壁中央に位置しており、壁を切り込むことなく、壁内に取り付ける形態であり石芯粘土カマドである。袖がやや南に向いてはいるが、これはカマドが崩れているためであり、構築時は直であったと考える。このカマドの規模は1.17m×1.15m、床面からの高さは70cmを測る。上部の石組はかなり崩れており、袖部の石2～3個が構築時の状態を保っていたにすぎない。煙道部等の確認はできず、また、カマド内外の焼土の量はきわめて少なかった。

柱穴状のピットは3本確認され、それぞれ$P_7$44cm×38cm、深さ14cm、$P_8$30cm×26cm、深さ8cm、P_{10}42cm×34cm、深さ20cmを測り、P_8は割合に浅く不整形なものであり、P_{10}は一部西側が袋状になるものである。主柱穴との確認はできなかった。

ローム混入の砂質暗褐色土混入黒色土が流れ込んだ状態で埋っており、第2号、第3号住居址を切っており、平安時代の住居址である。

第2号住居址　(第8、9図、図版3・6)

本住居址は調査区南部に位置しており、C－6グリットを中心に、A－4～8、B－4～9、C－4～9、D－5～9、E－5～8のグリットにかかって存在している。ほぼ正方形の平面プランを呈する竪穴住居址であり、その規模は南北軸8.72m×東西軸8.84mを測る。主軸方向はN69°Eを示す。軟質の砂混りのローム層を掘り込み、そこに砂質黒褐色土が落込んでおり、床面に近づくに



第5図　第1・3号住居址実測図

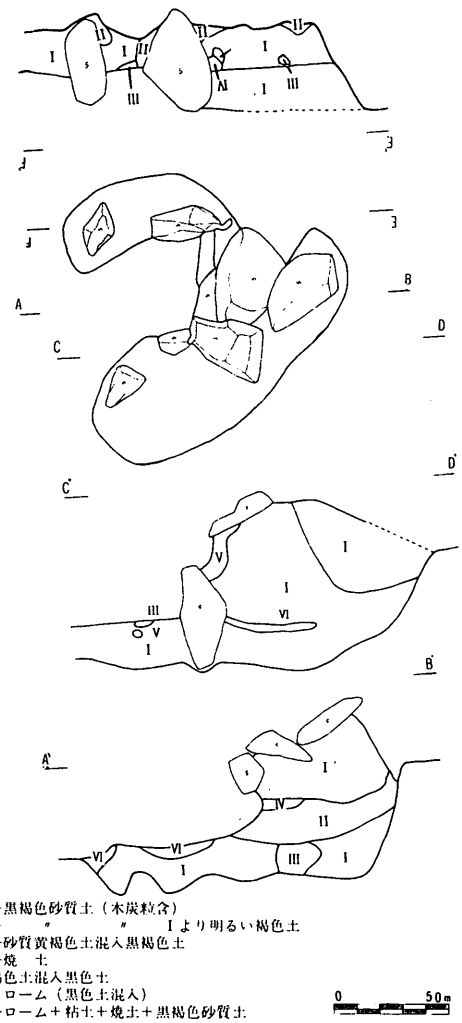
つれて、その覆土は褐色が強くなる土層であった。

壁は直に掘り込まれてあり、壁高は東壁で50cm、南壁で30cm、西壁で35cm、北壁で38cmを測り、その高さは西に進むほどに低くなっている。床面は概ね平坦であり、西隅に若干軟弱で凹凸のある部分もあるが、他の床面は固いタタキの状態となっており、中央部が周辺部にくらべてやや高くなっており、ぽっこりふくらんだ感じになっている。全般に比較的堅緻な良好な状態の床であった。

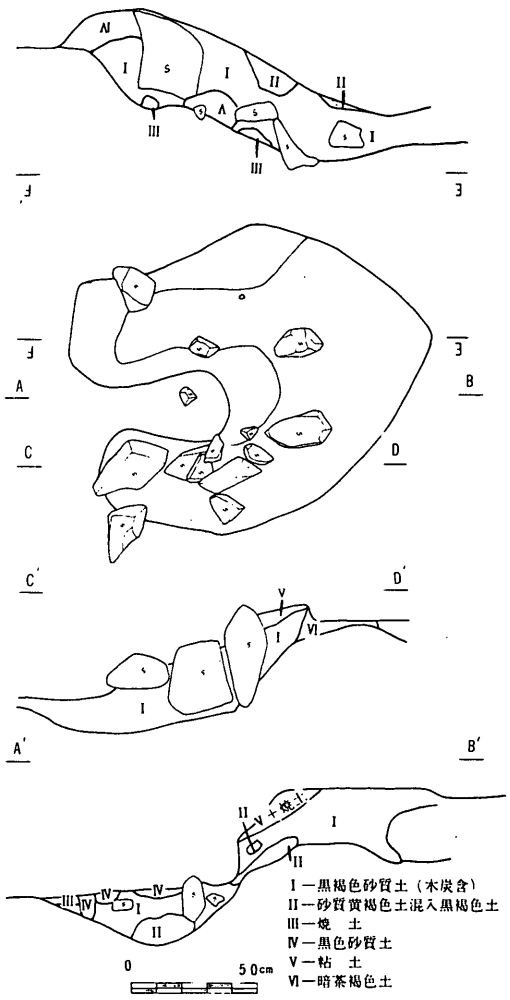
カマドは東壁中央に位置する石芯粘土カマドであり、その規模は1.80m×1.60mを測り、天井部

と南袖部に一部崩れたようなところもあったが、他はきわめて良好な保存状態を示しており、粘土等もきれいに残っていた。北側の袖部は30cm前後の石をすきまなく立てて組み、その石を覆うように黄色みをおびた（乾くと白色になる）粘土を10cmほどの厚さにつけてあり、カマドの高さは床面から約40cmほどである。煙道はきれいに通っており、出口は30cm前後の平板な石が大半を覆ってしまっていた。支脚石やまたそれに代るものと考えられるものは確認できなかった。しかし、カマド内下部の焼土の量は多く、厚さ10cmほどで内部全面に堆積していた。第11図のNo.2は粘土を取りのぞいた後の石組である。住居址の規模にマッチした大きなカマドであった。

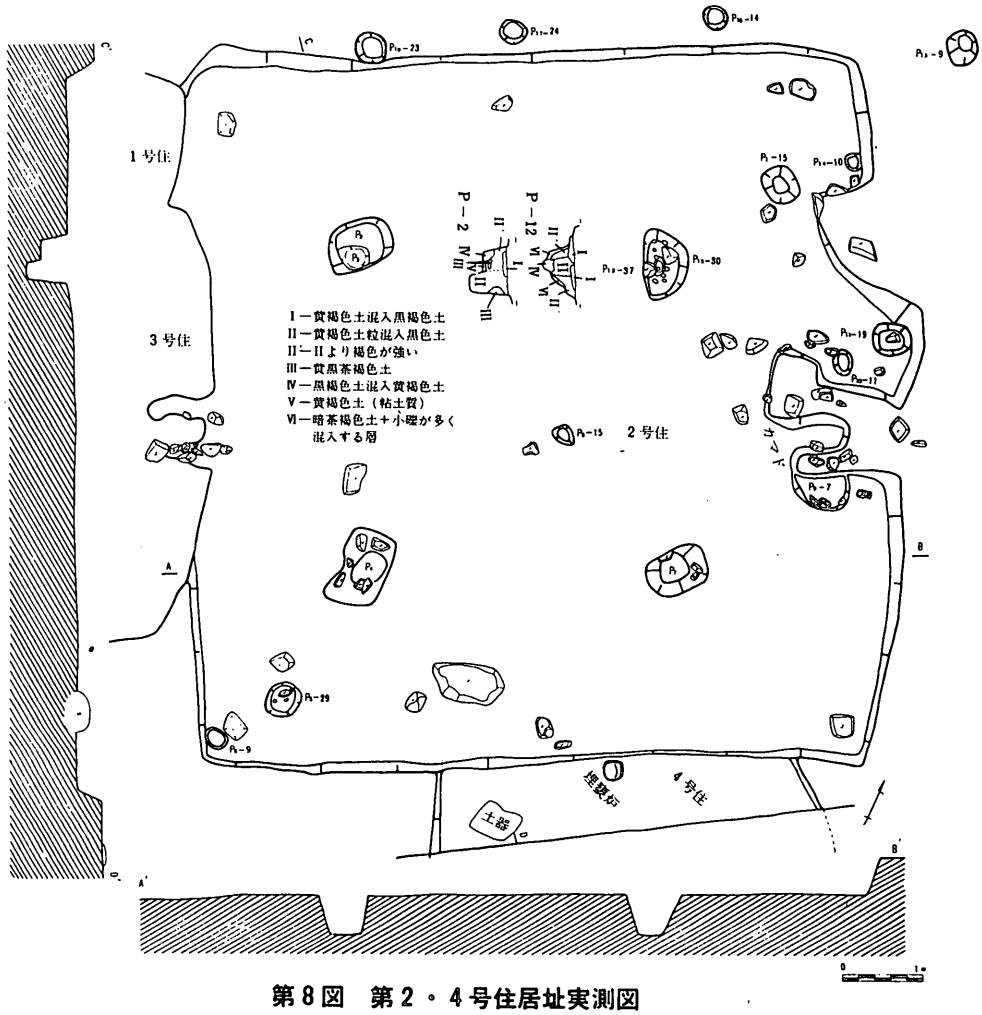
ピットは住居址内に11、壁外に3本検出された。そのうち主柱穴として4本確認でき、P_2（P_3）、P_{12}（P_{13}）、P_7、P_4、である。規模はP_{12}＝86cm×54cm、深さ37cm、P_7＝74cm×52cm、深さ48cm、P_2＝84cm×60cm、深さ52cm、P_4＝94cm×62cm、深さ44cmを測る。このうちP_{13}およびP_3は柱自体の太さと考えたい。P_2を除く他の柱内には柱の周囲に詰めたと考えられる礫及び、小礫がはいっており、P_2は



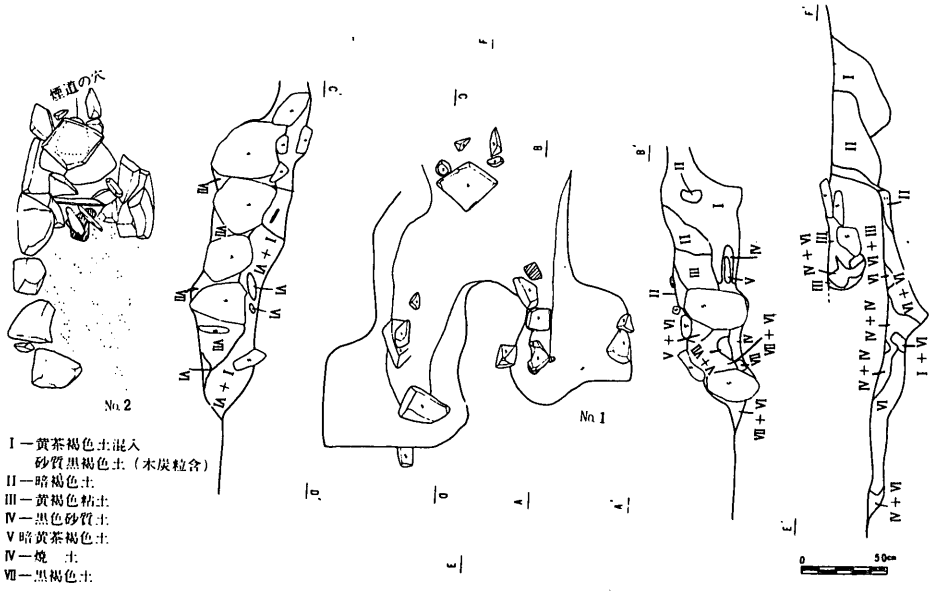
第6図　第1号住居址カマド実測図



第7図　第3号住居址カマド実測図



第8図　第2・4号住居址実測図



第9図　第2号住居址カマド実測図

礫はないが、黄色粘土を詰めてあった。この主柱穴4本で中央ややカマドよりにP_8があり、30cm×22cm、深さ15cmを測り、上屋を保つために必要な柱であろうか？。壁外で確認された3本のピットは本址に附属するものと考えられ、それぞれの規模はP_{16}＝32cm×30cm、深さ14cm、P_{17}＝36cm×30cm、深さ24cm、P_{18}＝40cm×40cm、深さ23cmを測る。なお、他の壁外にも当然同様のピットがあったと考えられるが、他の遺構等との切り合いのために確認できなあった。主柱穴の掘り方などもカマド同様に住居址にマッチした大きなものである。

本址は第1・3号住居址に切られ、第4号住居址を切る平安時代の住居址である。

第3号住居址　（第5、7図、図版2・6）

調査区南西隅に位置しており、D－3グリットを中心に、B－3・4、C－1～4、D－1～4 E－1～4のグリットにかかって存在している。隅丸長方形の平面プランを呈する竪穴住居址である、その規模は長軸が6.40m×短軸5.42mを測る。主軸方向はN69°Eを示す。

砂質茶褐色上層を掘り込み、砂質暗褐色土混入黒色土層が落込んでいて、ほぼ均一の覆土をしている。壁はほぼ直に切り込まれてあり、壁高は東壁で31cm、南壁で高いところが47cm、低いところで39cm、西壁は31cmを測り、北壁は第1号住居址に切られている。床面は若干の凹凸があるが、固くタタキの状態が良好な床であった。

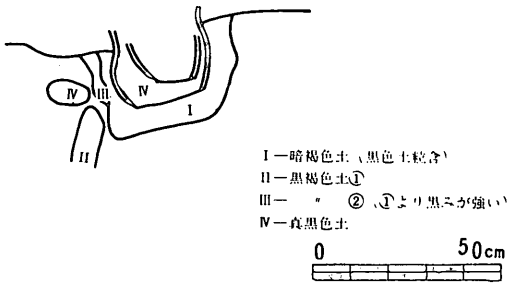
カマドは東壁の中央部やや南に位置しており、その形状は石芯粘土カマドである。上部の粘土はかなり崩れた状態で発掘された。床面からの高さは46cm、規模は1.45m×1.17mを測る。南側の袖石が概ね良好な状態で保存されており、その袖部の基にはP_6が掘られてあった。灰捨て場的な用途のものであろう。焚口から約55cm奥にはいったところに支脚石があり、10cm×高さが20cmの自然石を利用している。床をかなり掘り込んでおり、壁もやや切って構築されている。全般に焼土は少なかった。

柱穴状のピットは住居址内に2、壁を切って1、壁外に2の計5ヶ検出された。その規模はそれぞれP_1＝46cm×44cm、深さ34cm、P_2＝50cm×40cm、深さ27cm、P_3＝52cm×46cm、深さ32cm、P_4＝56cm×50cm、深さ20cm、P_5＝56cm×44cm、深さ25cmを測る。主柱穴等の確認はできなかったが、壁外にある2ケの柱穴状のピットも本址に附属するものと考えたい。

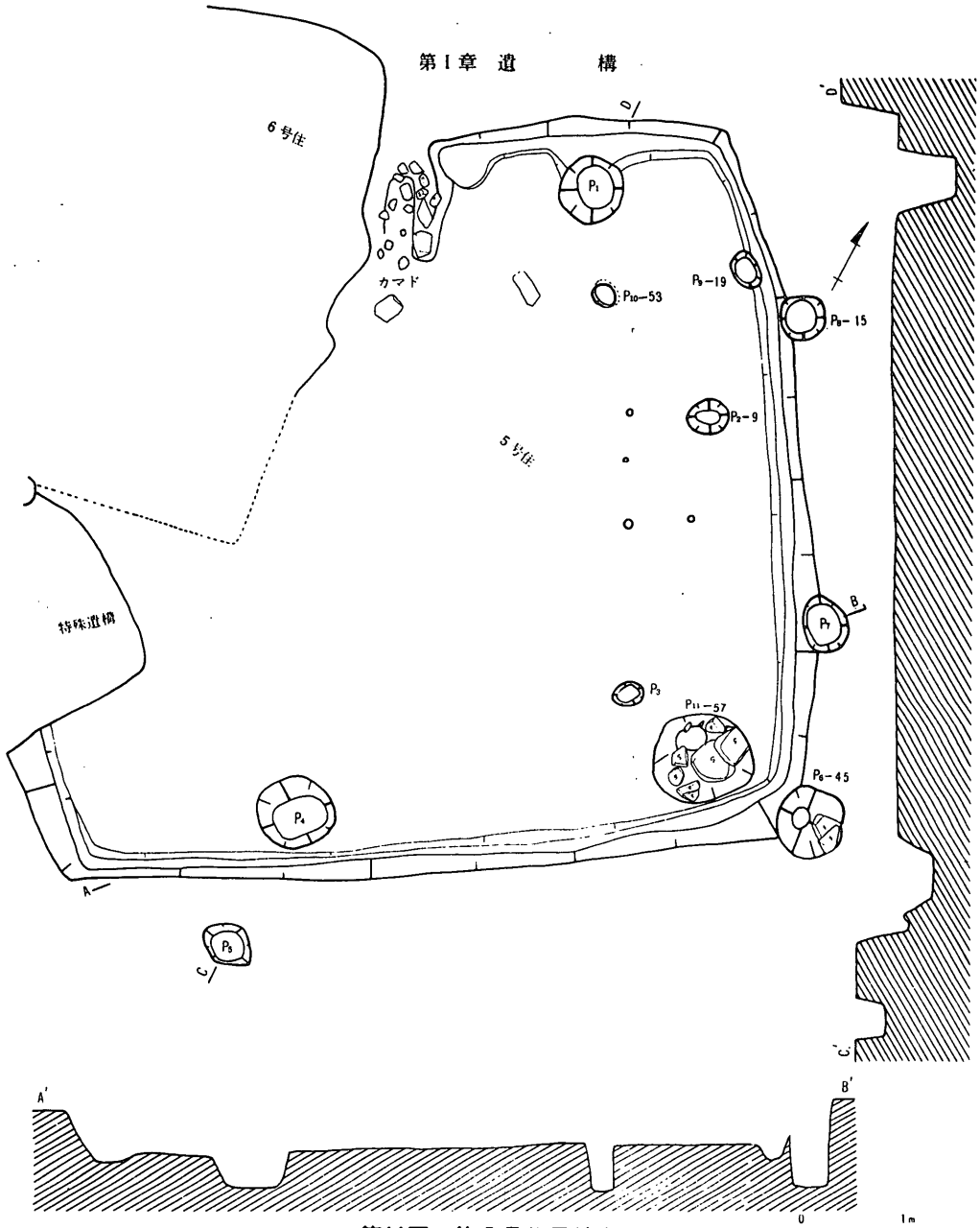
本址は第1号住居址に切られ、第2号住居址を切る平安時代の住居址である。

第4号住居址　（第8、10図、図版3・7）

調査区最東端にあり、その大半が今回の調査区外に存在しているために完全なる調査はできなかった。平面プランはおそらく長方形を呈するものと考えられる竪穴住居址である。その規模は東西軸が約4.80mを測定でき、南北軸は不明である。砂質の黒褐色土が覆土となっており砂質茶褐色土を掘り込んでいる。壁は直に掘り



第10図　第4号住居址埋甕炉断面図

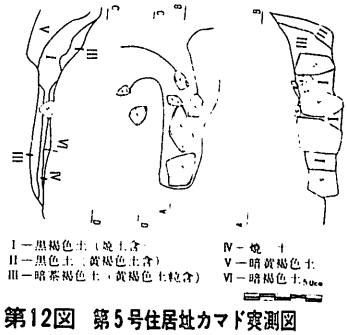


第11図　第5号住居址実測図

込まれてあり、壁高は東壁で24cm、西壁で18cmを測る。床面は概ね平坦で堅微な良好なものであった。

炉址は埋甕炉であり、口唇部の一部と底部とを欠損した甕を二重に埋めてあり、やや西に傾斜している。炉の周辺及び甕内の焼土は少なく、炭火物の混入した真黒色土が甕の中につまっていた。第2号住居址の壁ぎわにあり保存状態はあまり良くない。柱穴等のピットの検出はできなかった。

本址は第2号住居址に切られる弥生時代後期の住居址である。



第12図　第5号住居址カマド実測図

第5号住居址　（第11～12図、図版4）

調査地区北部のほぼ中央に位置しており、G—13グリットを中心にしてE—11～14、F—11～15 G—11～15、H—13～15グリットにかかって存在している。隅丸長方形の平面プランを呈する竪穴住居址であり、その規模は長軸が約7.88m×短軸6.62mを測り、主軸方向はN29°Wを示す。

軟質ローム層を掘り込んであり、砂質黒褐色土が流れこんでおり、中央部は黒色の強い同様の覆土をしている。壁は西壁でいくぶん外傾しているが他は概ね直に立ちあがっている。壁高は東壁41cm、西壁40cm、南49cm、北53cmを測定できる。床面は周辺部は部分的に軟弱なところもあるが中央部は若干の凹凸もあるが、タタキの状態の比較的堅緻で良好なものであり周辺部がやや高く、中央部のやや凹む床である。

本址の床面、壁直下には壁溝が廻っており、西側と北側の一部は他の遺構に切られているためさだかではないが、この壁溝は全周しているものと思われる。壁溝の巾は西側で8cm、南側で一番幅の広い部分で34cm、狭い部分で27cm、東側で幅広の部分21cm、狭い部分16cm、北側は26cmを測る。そしてその深さは東側が深く11cmを測り、他は深い部分で7cm前後、浅い部分で4cm前後を測定できる。ピットは住居址内に7、壁を切って3、壁外に1、検出され、それぞれの規模はP_1＝62cm×59cm、深さ52cm、P_2＝32cm×38cm、深さ9cm、P_3＝28cm×23cm、深さ37cm、P_4＝68cm×64cm、深さ29cm、P_5＝50cm×39cm、深さ26cm、P_6＝63cm×60cm、深さ45cm、P_7＝52cm×40cm、深さ25cm、P_8＝40cm×38cm、深さ15cm、P_9＝35cm×24cm、深さ19cm、P_{10}＝23cm×20cm、53cm、P_{11}＝92cm×78cm、深さ57cmをそれぞれ測る、P_1、P_4、P_{11}は主柱穴と考えられ、P_{11}には35cm前後の割合平板な石や小礫が詰めてある。東壁寄りには小ピットがいくつか穿ってあり又P_{10}は一部袋状となっていて、深いピットである。

カマドは北壁のほぼ中央部と思われるところに構築されてあり、その形状は石芯粘土カマドである。かなり崩れてしまってあり、また6号住居址に西半分を破壊されていて構築時の姿はとどめていない。東側の袖部の石組は概ね当時の状態を保っているものと思われる。中央部に支脚石として利用された石もあり、焼土は5cm前後の厚さで堆積していた。また、土師器の甕等の胴部片をカマドの補強に利用しており、カマドの内側に平坦に貼り付けてあった。かなり袖部の長いカマドであり床面からの高さは約25cmを測る。

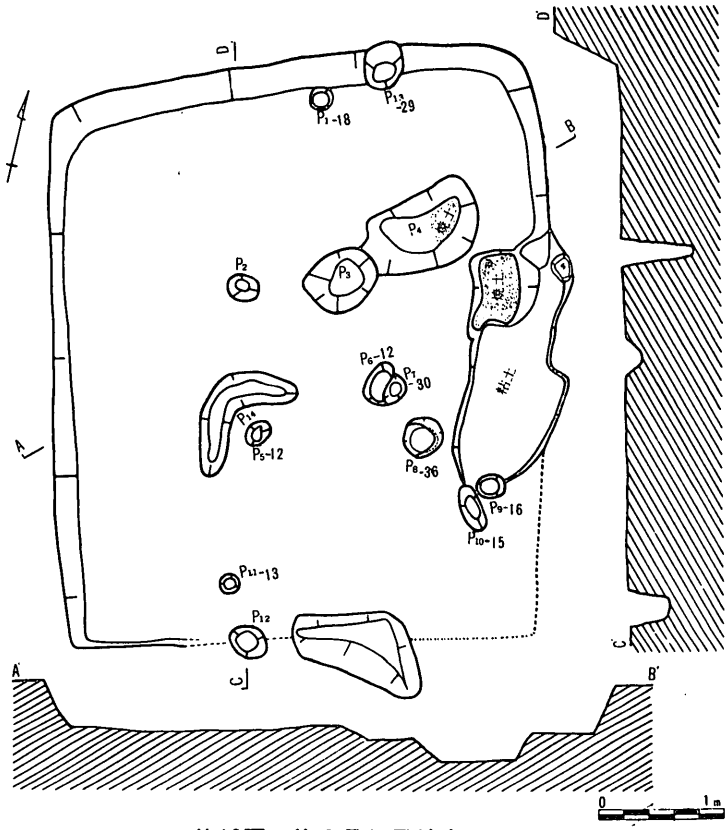
第6号住居址と特殊遺構に切られ、第7号住居址に貼床される古墳時代の住居址である。

第6号住居址　（第13図、図版4）

調査地区北西隅に位置しており、H—12グリットを中心として、G—11～13、H—10～13、I—11～13グリットにかかって在在している。隅丸長方形の平面プランを呈する竪穴住居址であり、その規模は長軸が約4.60m×短軸3.98mを測り、主軸方向はN68°Eを示している。

軟質ローム層を掘り込み、軟質黒褐色がこれに落ち込み、覆土下層部はこれにローム粒が混入している。壁はいくぶん外傾しており、壁高は東壁36cm、西壁37cm、南壁50cm、北壁59cmを測る。床面は全般に軟弱なところがおおく、周辺部の方がしっかりしている。概ね平坦な一部タタキ状になっている。カマドは東壁の中央部やや北寄りにあり、その形状はおそらく石芯粘土カマドであった

と思われるが、ほとんどが崩れており、わずかに焼土と粘土がカマドであったことを示しているにすぎない。焼土はやや凹んでありその南側に黄緑色の粘土がもりあがって広く崩れた状態である。ピットは数多く検出され、床面内に11、壁を切って2の計13ケあり、その規模等はP_1＝19cm×18cm、深さ18cm、P_2＝26cm×20cm、深さ57cm、P_3＝57cm×48cm、深さ13cm、P_4＝91cm×60cm、深さ22cm、P_5＝22cm×17cm、深さ12cm、P_6＝35cm×？cm、深さ12cm、P_7＝25cm×16cm、深さ30cm、P_8＝33cm×31cm、深さ36cm、P_9＝24cm×20cm、深さ16cm、P_{10}＝38cm×27cm、深さ15cm、P_{11}＝16cm×15cm、深さ13cm、P_{12}＝33cm×27cm、深さ29cm、P_{13}＝37cm×31cm、深さ29cmをそれぞれ測り、P_{14}は帯状、P_8は一部袋状になっている。P_4の内には焼土が混入しており灰捨て場的な用途のピットであろう。主柱穴等の確認はできなかった。南端のマウンド状のロームは本址の壁の残りと考える。



第13図　第6号住居址実測図

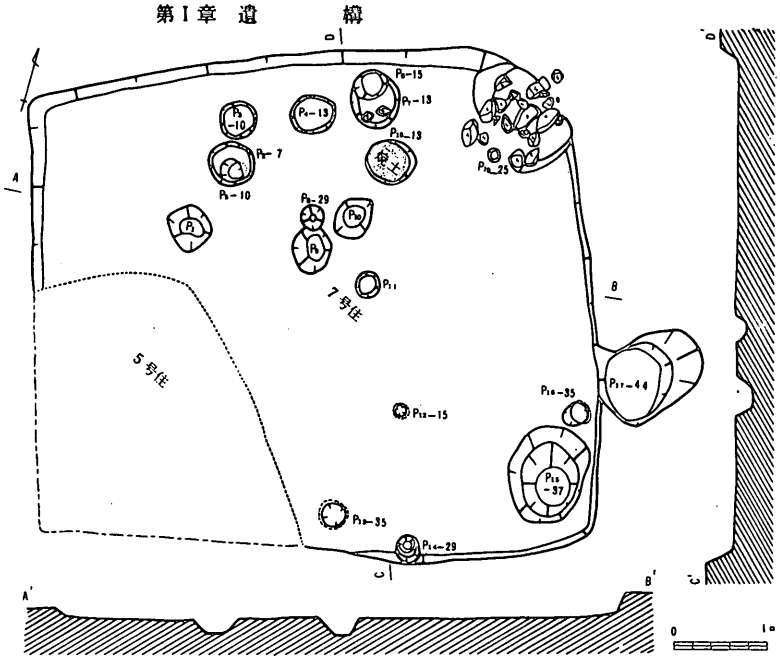
本址は5号住居址を切り、一部特殊遺構に切られる奈良時代の住居址である。

第7号住居址　（第14～15図、図版4・8）

調査地区北端に位置しておりG—15グリットを中心にして、F—15～17、G—13～17、H—14～17、I—14～16グリットにかかって存在している。隅丸長方形の平面プランを呈する竪穴住居址であり、その規模は長軸5.95m×短軸5.36mを測り、主軸方向はN18°Eを示す。

軟質ローム層を掘り込んでおり、砂質黒褐色土が落ち込んでいる。壁はほぼ直にたちあがり、壁高は東壁19cm、西壁26cm、南壁14cm、北壁28cmをそれぞれ測る。床面はタタキ状にはなっているが中央部はやや軟弱な部分もあり、南の隅にあたる床面は黄褐色土の貼り床となっていた。凹凸のある床面である。ピットは合せて18検出され、それぞれの規模等は、P_1＝30cm×30cm、深さ5cm、P_2＝50cm×46cm、深さ7cm、P_3＝40cm×39cm、深さ10cm、P_4＝49cm×39cm、深さ13cm、P_5＝23cm×23cm、深さ10cm、P_6＝38cm×30cm、深さ13cm、P_7＝61cm×51cm、深さ15cm、P_8＝26cm×26cm、深さ29cm P_9＝50cm×42cm、深さ16cm、P_{10}＝51cm×38cm、深さ17cm、P_{11}＝30cm×27cm、深さ10cm、P_{12}＝13cm×

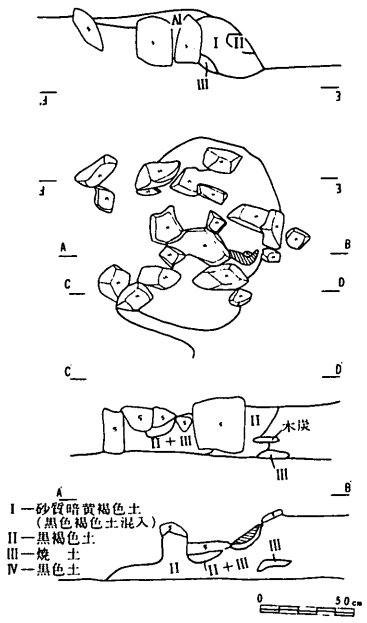
12cm、深さ15cm、P_{13}＝26cm×25cm、深さ35cm、P_{14}＝36cm×25cm、深さ29cm、P_{15}＝100cm×83cm、深さ37cm、P_{16}＝28cm×23cm、深さ35cm、P_{18}＝49cm×47cm、深さ13cm、P＝23cm×25cm、深さ25cmをそれぞれ測る。このうち、P_{14}は壁を切り、P_{12}、P_{13}は全体が袋状となる。P_{18}は内に焼土がかなりはいっており灰捨て場的なものか。なおP_{17}は本址を切る土坑である。比較的浅めのものが多く主柱穴は不明。



第14図　第７号住居址実測図

カマドは東壁北隅に位置し住居址のコーナーの壁を切って構築されている。石芯粘土カマドと思われるが、粘土部は残っておらず、石組もかなり崩れていた。その規模は2.03m×1.60mを測り、床面からの高さは約60cmである。焼道や支脚石は確認できなかった。焚口の中央にP_9が掘られてあり、奥壁には灰釉陶器が貼りついてあった。焼土は比較的少なく、小規模のものであった。

本址は５号住居址上に貼り床し、８号住居址を切る平安時代の住居址である。

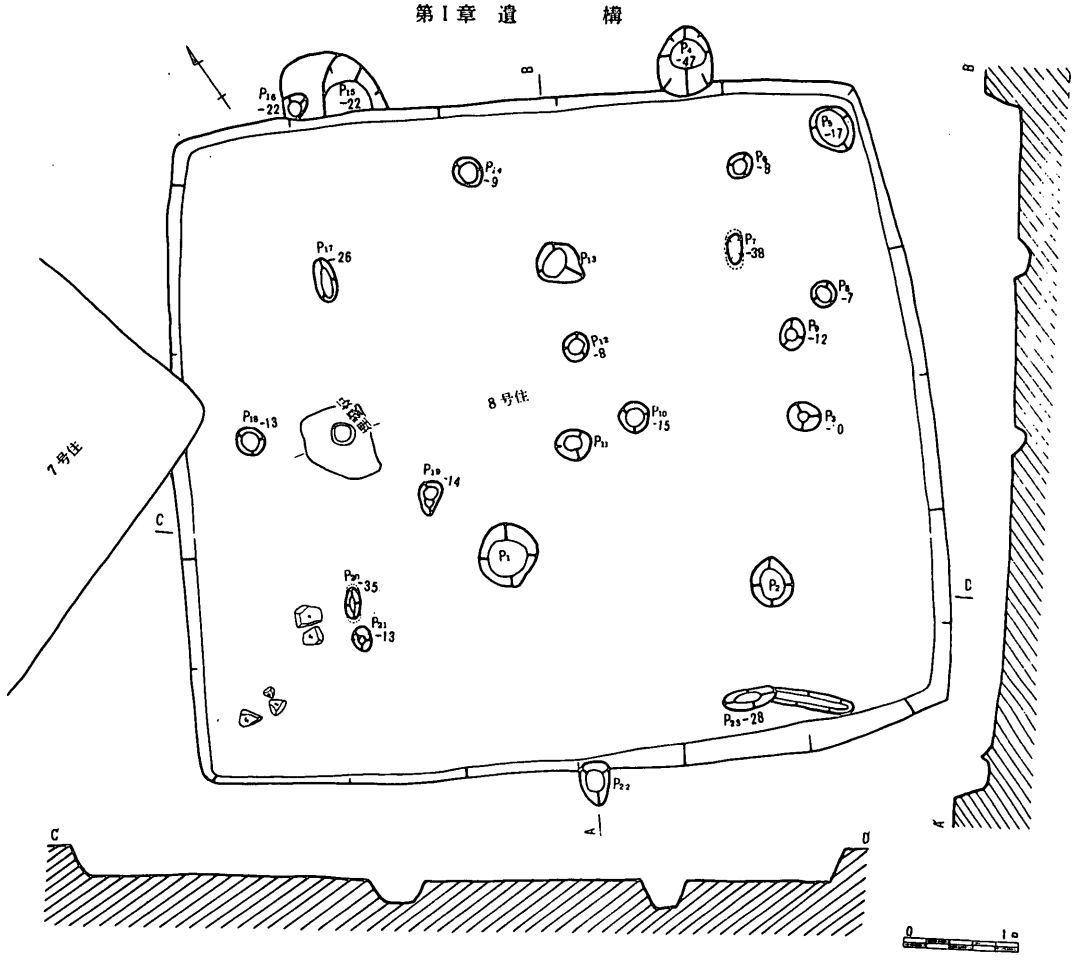


第15図　第７号住居址カマド実測図

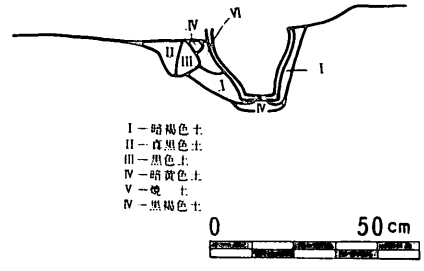
第８号住居址　（第16～17図、図版５・８）

調査地区東隅に位置しており、D—16グリットを中心にして、B—15、16、C—15～18、D—15～18、E—14～17、F—16・17グリットにかかって存在している。長方形の平面プランを呈する竪穴住居址であり、その規模は長軸6.53m×短軸5.82mを測り、主軸方向はN59°Wを示す。

軟質ローム層を掘り込み、砂質黒色土がこれに落込んでおり、覆土下層は砂質の暗褐色土となっている。壁は四方ともほぼ直立しており、東壁13cm、西壁15cm、南壁14cm、北壁13cmとほぼ一定している。床面は概ね平坦で堅緻なきわめて良好な状態であった。ピットは住居址内に19、壁を切って２の計21ケが検出された。それぞれの規模等はP_1＝45cm×38cm、深さ19cm、P_2＝45cm×38cm、深さ23cm、P_3＝30cm×26cm、深さ10cm、P_4＝61cm×48cm、深さ47cm、P_5＝42cm×38cm、深さ17cm、P_6



第16図　第8号住居址実測図



第17図　第8号住居址埋甕炉断面図

＝23cm×23cm、深さ8cm、P_7＝26cm×14cm、深さ38cm、P_8＝23cm×23cm、深さ7cm、P_9＝29cm×23cm、深さ12cm、P_{10}＝27cm×27cm、深さ15cm、P_{11}＝32cm×27cm、深さ10cm、P_{12}＝26cm×23cm、深さ8cm、P_{13}＝37cm×34cm、深さ11cm、P_{14}＝26cm×26cm、深さ9cm、P_{17}＝37cm×20cm、深さ26cm、P_{18}＝26cm×25cm、深さ13cm、P_{19}＝22cm×16cm、深さ14cm、P_{20}＝28cm×15cm、深さ35cm、P_{21}＝22cm×17cm、深さ13cm、P_{22}＝30cm×27cm、深さ28cm、P_{22}＝30cm×27cm、深さ28cm、P_{23}＝39cm×19cm、深さ28cmを測る。主柱穴はP_2、P_7、P_{17}、P_{20}と考えられ、このうちのP_7、P_{17}、P_{20}は長円形の掘り方を呈し、P_7は全体が袋状、P_{20}は中段が袋状の断面形をなしている。またP_{23}もこれに類似した形のピットである。これらの柱はこの掘り方に準じた形の柱を用いているものと考えられ又P_3、P_{10}、P_{13}は炉址の軸線上に一直線にならんでいる。P_{15}、P_{16}は本址に切られる土坑であろう。

炉址は住居址西側よりの中央部に位置しており、埋甕炉である、口縁部の一部欠損した甕を利用しており、周辺部を床面よりやや低くしてある。掘り方は甕よりやや大きめの穴を掘り込んであり

また周辺部、炉内に焼土は少なく、甕の中には炭火物を多く含んだ真黒色土が多くつまっていた。

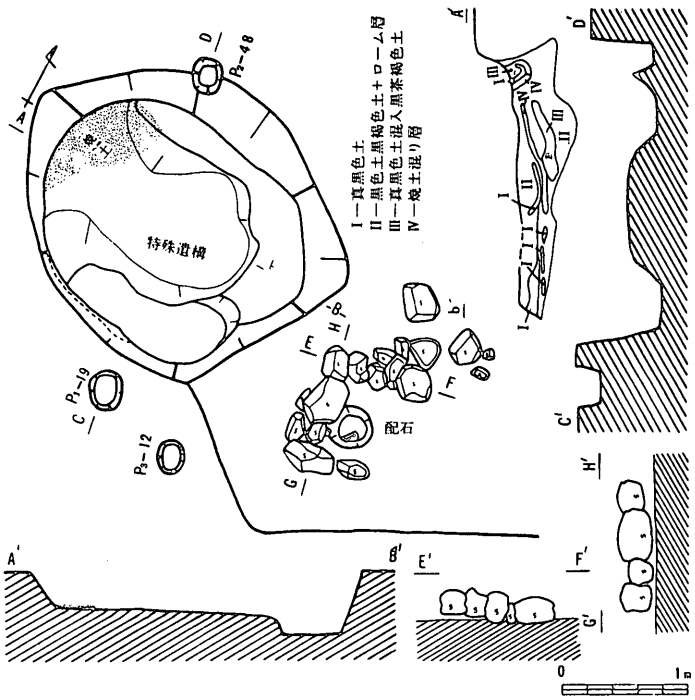
本址は7号住居址に切られる弥生時代後期の住居跡である。　　（田畑辰雄）

第2節 特 殊 遺 構

特殊遺構　（第18図、図版4）

第5号住居址の西に位置しており F—10～12、G—10・11グリットにかかって存在している。

規模は2.60m×2.18mの不整な長円形を呈する竪穴である。砂質黒色土を掘り込んで行くと、下層は焼土混りの覆土が部分的にあり黒色土と黒褐色土とが混入する軟いロームにつきあたる。このロームはマウンド状になっており、ちょうど亀の甲羅のごとくに盛りあがっていて、その西側の壁近くには焼土がかなりの範囲に堆積している。第20図のA′—B′はそのマウンド部の断面図である、黒色土と黒褐色土が混入するロームの中に他の土が帯状に堆積しており、その中には焼土の混入する層もありマウンド内部より土師器等の遺物が出土している。P_2は第6号住居址に附属するピットであり、南壁の一部が袋状となる。第5号住居址と第6号住居址の一部を切って構築されている。



第18図　特殊遺構・第1号配石址実測図

（田畑辰雄）

第3節 配 石 址

第1号配石址（第18図、図版4）

第5号住居址の床上に存在する石囲状を呈する配石址である、規模は1m前後の方形で、東側と北側の一部には石は存在しなかったし、また抜き取られた様子も認められなかった。中央部の西側寄りにはピットがあり、その規模は34cm×32cm、深さ15cmを測ることができる。割合整然と組まれた石であり、その石は花崗岩の自然石を用いている。第5号住居址に附属する遺構とは考えがたく、これを切って構築されたものと考えるが、遺物等は何も出土せず、存在した時期や、遺構の性格の判断をくだすことはできなかった。　　（田畑辰雄）

第II章　出　土　遺　物

当遺跡の調査地区内より出土した遺物は弥生式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石器等が出土しており、これらのなかでもとりわけ土師器の出土量が多く、器形別にみてみると杯形土器の量が他を圧倒している。ここでは住居址等の遺構内出土の遺物を主にのせてある。以下遺構別に記述をすすめるが、それぞれの遺物には客観的な観察を重視した。また弥生時代遺物については時間等の都合で土器拓影はこれを割愛し、実測図のみを掲載した。

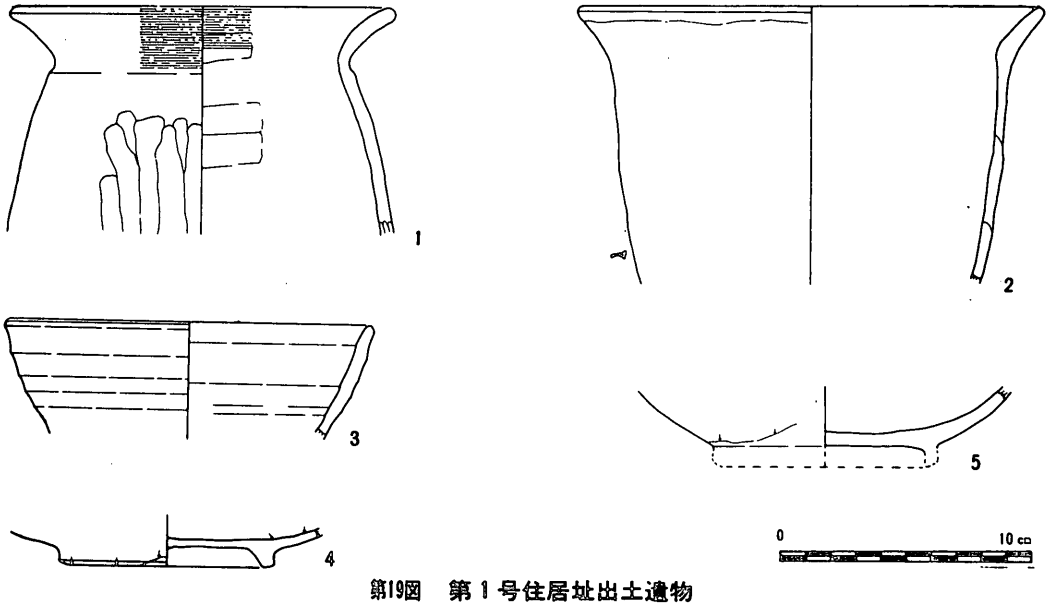
第１節　住居址出土遺物

第１項　第１号住居址　（第19図）

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、須恵器の量がやや多めであった。遺物は覆土中～下層に多く、続いてカマドやカマド周辺部からの出土が多い。ほとんどが小破片であり、ここでは４点を図示した。（第19図）

土師器では粗いカキ目痕のある甕の胴部片、甑の把手、ロクロを使用した極薄手の小形甕などが出土しており、杯形土器の出土は少ない。第21図―２は甕形土器で、その整形は外面と内面の口縁部は櫛状の工具によるカキ目、内面胴部はヘラ状工具によるナデ整形が施されている、色調は外面淡灰褐色、内面暗褐色を呈し、小石粒、雲母を含む良好な胎土をもっている、口径18.6cm、胴部最大径は上半部にあると思われ、長胴形のものであろう。

須恵器は蓋杯、杯、甕、壺等の小破片が出土し、比較的多めの出土である。３はカマドから出土



第19図　第１号住居址出土遺物

した須恵器杯形土器である。口縁部がやや外反し口径14.4cmを測る。ロクロによる水引き整形痕が割合顕著である。色調は内、外面ともこげ茶色を呈しており、 鉄分を多く含む胎土だからであろうか？

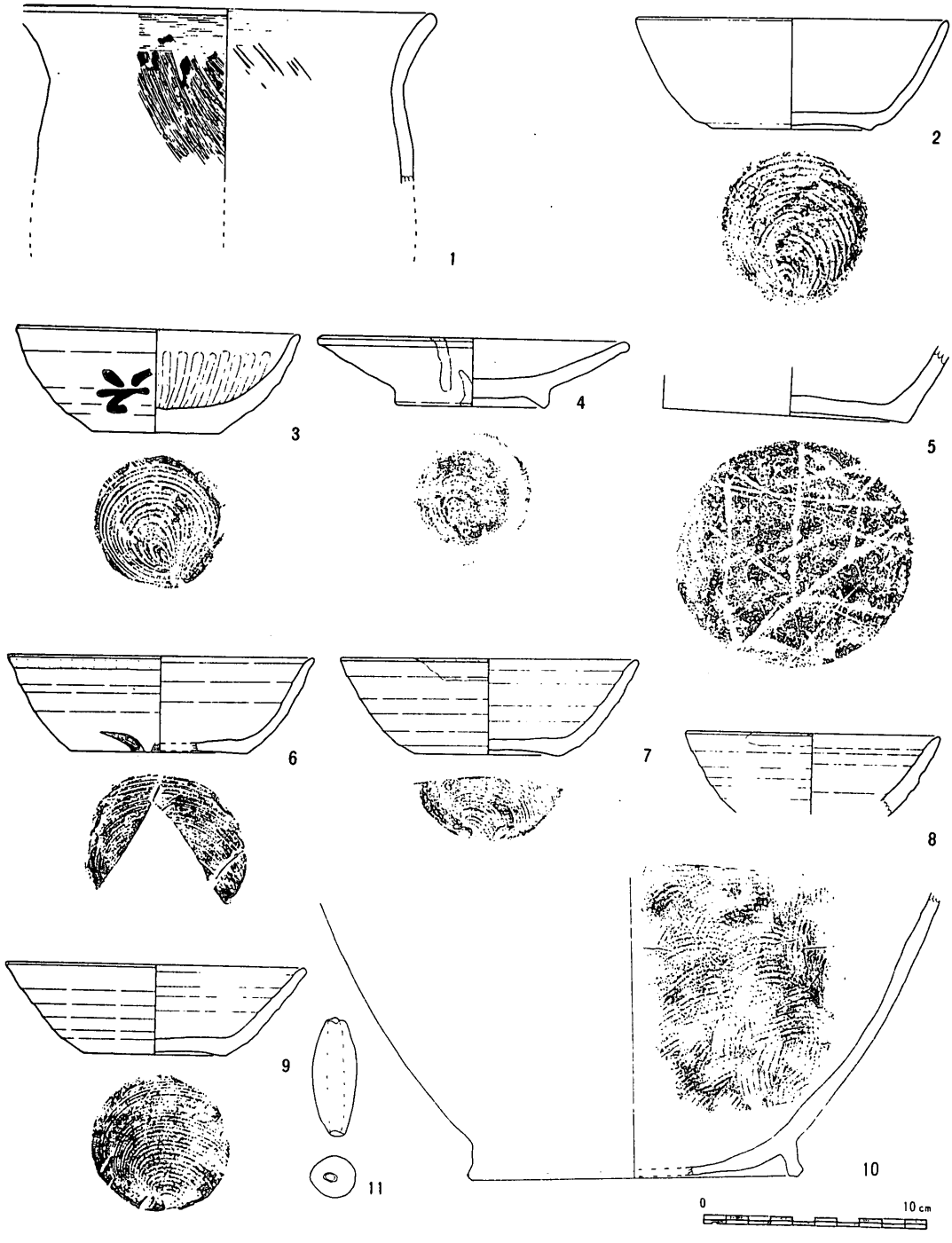
灰釉陶器は碗か皿の破片が計6点、壺の底部と胴部片がそれぞれ1点づつ出土している。4は皿、5は碗、それぞれ底部まで青白灰色の釉がかかっており、とくに4は厚くかかっている。4は底部外面中央にヘソがあり、ヘラ整形の痕であろう。ともに黒笹90号窯期のものであろうか。

第2項 第2号住居址 （第20図）

遺物の出土量の多い住居址であり、覆土の上層から床面にいたるまでまんべんなく出土しており小破片が大部分である。

土師器では、甕、杯、皿形土器が出土しており、第22図—1は床面から出土した甕形土器であり長胴形のものであろう。口縁部は内、外面ともに横ナデ、頸部から胴部にかけてはヘラ削り整形が内面はやわらかいカキ目整形が施されている。色調は外面灰暗褐色、内面淡暗褐色を呈し、小石粒、雲母粒を含む胎土をもち、口唇部にやや丸味をもつものである。口径18.1cm、2—3は杯形土器であり、それぞれ床面から出土しているものである。2は外面茶褐色、内面灰茶褐色を呈し小石粒を多く含む粗雑な胎土ではあるが焼成は良好なものである。口唇は直立し胴部にややふくらみをもち、底部直上で一段の稜をもっている。口径14cm、底径7.1cm、器高4.9cm、底部は糸切である。3はやや外傾ぎみの口唇部と丸味をもち厚い胴部とをもち、外面の色調は茶褐色、内面は黒色である。外面中部中位から下位にかけて墨書がされてあり、「六」という文字を逆に書いてある。小じんまりとした、柔和な感じのする筆跡である。内面はヘラ状の工具によるナデ整形が施されてあり、黒色はいくぶんか研磨されている。小石粒が散見、胎土、焼成ともに良好な土器である。口径12.7cm、底径5.8cm、器高4.5cm、底部は糸切である。4は高台付の皿形土器であり床面から出土している。やや厚めの胎土をもち、口唇部が外側に急折しており、胴部の中央部にややふくらみをもっている。外面明茶褐色、一部赤褐色、内面は黒色、一部黒色がとれている部分もある。外面にも帯状にこの黒色がついている箇所もある。底部は糸切の後よわいヘラナデがおこなわれ高台がとりつけられている。口径13.6cm、底径6.5cm、器高3.0cm。5は甕形土器の底部、木葉痕である。

須恵器では蓋杯、杯、壺等が出土している。出土量は土師器に比して少ない。蓋杯は図示してないがその端部が僅かに内折するものと、急屈折させるものとの二通りがある。6～9は杯形土器ですべて床面から出土している。8以外は口唇部が外傾し6は強く外傾しており、6·7·8·は、胴部に若干のふくらみをもち、9はほぼ直に口唇部へとつながっている。それぞれの色調等は6の内外面ともに灰白色、外面口縁部は黒青灰色、小石粒散見、7—内外面とも青灰白色、小石粒を含む、外面の口縁部に一部分黒灰色、8—内外面灰白色、口唇部外面の一部黒灰色、9—内外面ともにねずみ色、内面はやや灰色がかったねずみ色、口唇部に自然釉がかかっている。それぞれロクロによる水引痕が顕著であり、とくに8はきわだっている。6は水引き整形の後全面にヘラ状工具を用いてナデ整形をロクロを回しながら行っている。7も6と同様な整形が施こされ、6·7·9·は底部糸切りである。6—口径13.2cm、底径8.0cm、器高4.2cm、7—口径13.3cm、 底径6.5cm、 器高4.3cm、



第20図　第２号住居址出土遺物

8—口径11.3cm、9—口径13.5cm、底径6.4cm、器高4.0cm。10は須恵器の瓶の底部附近で、自然釉がかかっている。外面はタタキ目、内面青海波文がある、かなり良質の胎土をもつものである。底径14.5cm。11は床面直上から出土したる土錘で、長さ5.3cm、最大径約2cmを測る。

灰釉陶器は覆土中より破片が1片出土しただけであり、本址につくものかどうか疑問である。他に鉄滓が出土している。

第3項　第3号住居址

土師器、須恵器等が出土しているが、いずれも小破片で少量出土しているのみであり、図示はしなかった。土師器では甕形土器の胴部片が出土しており、カキ目痕があるものである。

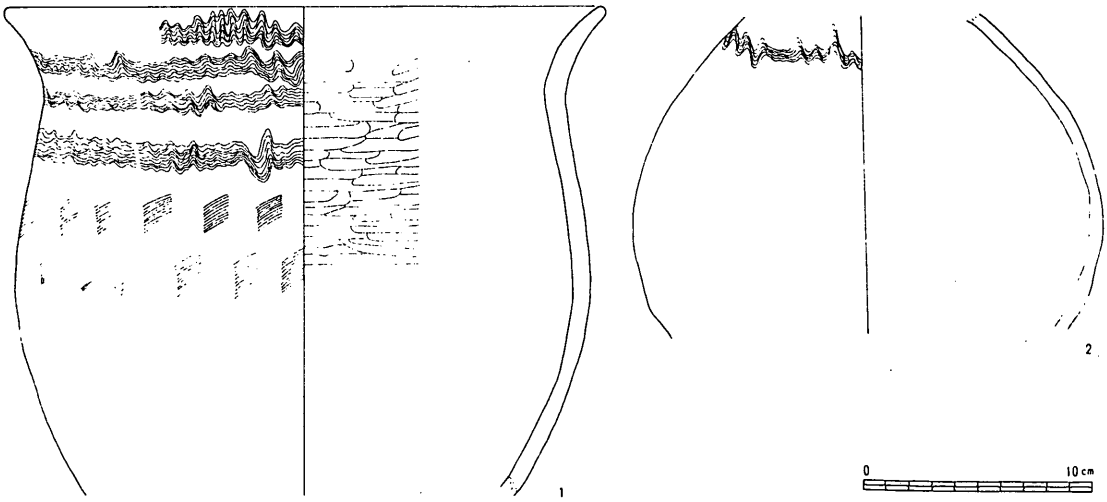
須恵器では高台付の杯形土器の底部等が出土しており、いずれも床面近くからの出土である。灰釉陶器は発見されず、鉄器等も出土しなかった。

第4項　第4号住居址　（第21図）

甕等の胴部破片、底部などが覆土および床面から出土している。出土量はきわめて少ない。第23図1、2はともに埋甕炉として使用されていたものであり、2は1の内にはいっていたものである。

1は胴部下半から底部までを欠損している甕であり胎土、焼成ともに良好なものである。口唇部から頸部にかけて4列の波状文が、そしてその下に斜走短線文が2列にわたって施文されている。器面の整形は胴部外面は弱いカキ目痕が頸部以下の全面にわたっており、内面は頸部から胴上半部にかけて丁寧なヘラナデ整形が施され、また外面胴部には二次的焼成のために付着したと考えられる炭化物がある。

2は壺に近い形をしているものであり、口縁部と胴下半部を欠損するものである。肩部附近に波状文が施文されている。ややざらついた感じのする胎土をしており、器面はかなりすりへっていた。

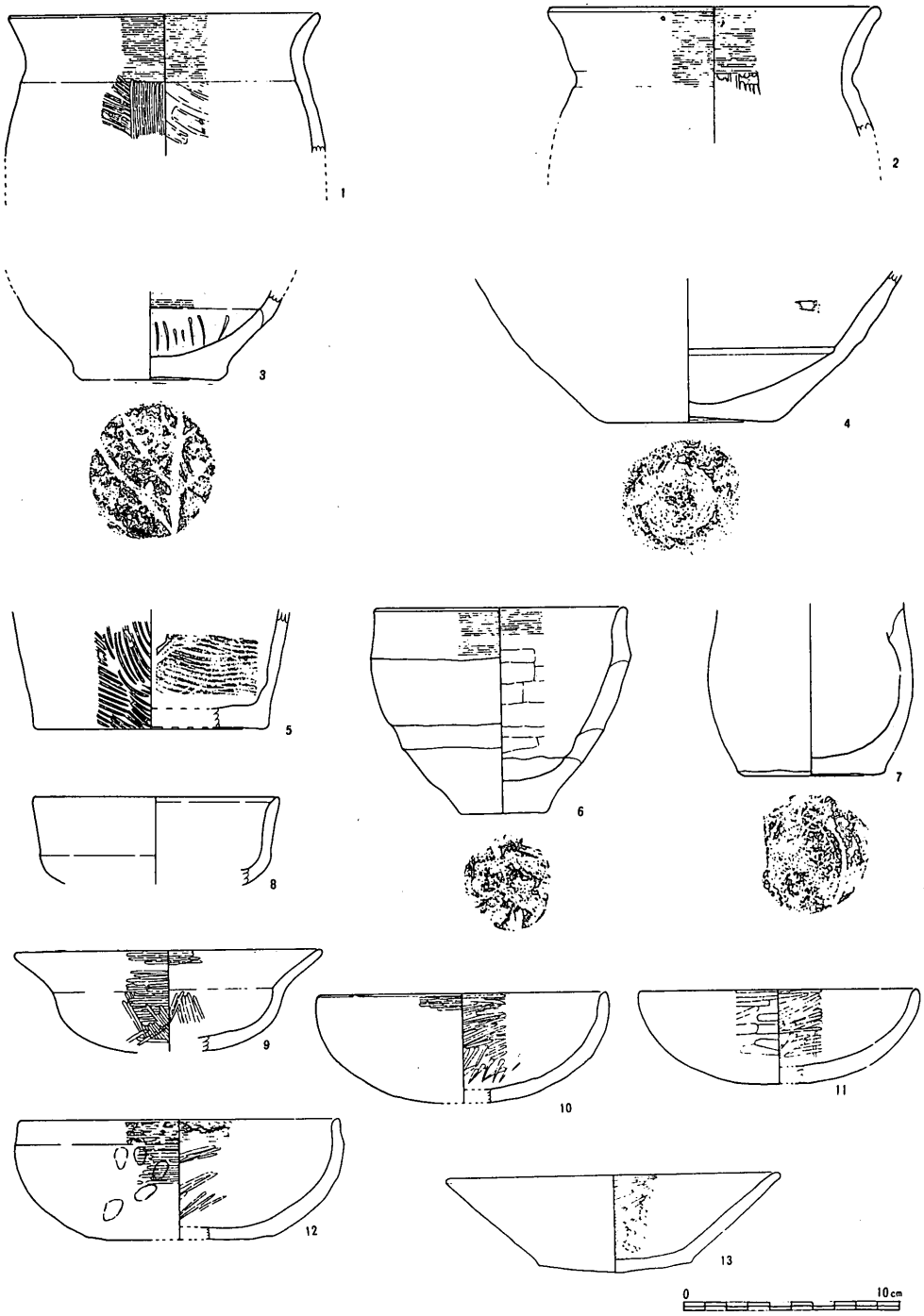


第23図　第4号住居址出土遺物

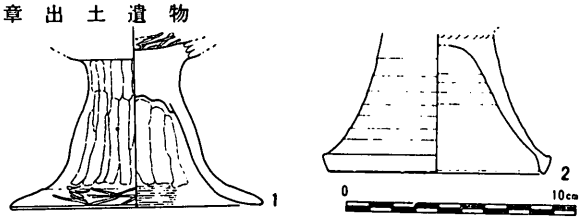
第5項　第5号住居址　（第22、23図）

土師器と須恵器が出土している。土師器では甕、鉢、碗、杯、高杯が、須恵器では高杯と思われる脚部が出土している。

土師器の甕形土器（第24図1、2、4、5）は2をのぞいてすべてカマド内からの出土である。1は外面淡赤褐色、内面暗茶褐色の色調を呈し、胎土中には雲母を多量に含み、小石粒が散見されるが焼成は良好である。整形は内、外面ともに横ナデ、頸部から胴部にかけて外面は櫛状の工具による弱いカキ目が縦、横、斜方向に施され、内面はヘラによる横ナデ整形がされている。口径14.2cm、2は覆土中より出土したもので内、外面ともに色調は黒茶褐色を呈し、口縁部内外の整形は横ナデ、内面頸部にカキ目整形されている。1、2ともに頸部に弱い稜線をもち、2の口径15.3cmを測る。4、5は底部であり、4は内、外面ともに淡明褐色、小石粒、雲母を多量に含む粗雑な胎土をしており、外面底部附近に二次焼成痕がある。5は外面暗黒茶褐色、内面灰茶褐色の色調を呈し、雲母粒を多量に含む粗雑な胎土をしており、その整形は内、外面ともに櫛状の工具による荒いカキ目が施され、底部の内面にまでおよんでいる。3は覆土中より出土した鉢形土器と思われ、内面は黒色を呈し、外面は暗褐色の色調、内面には暗文状のヘラ整形痕があり、一部横ナデもされている。底部は木葉痕があり、底径は6.3cmを測る。6、7も同様に鉢形土器である。小形のもので6は外面黒褐色、内面暗茶褐色の色調を呈し、輪積痕が顕著な粗雑な作りのもので、口縁部の内、外面ともに横ナデ、内面の胴部はヘラ削りがされていて焼成もあまりよくない。口径11.7cm、底径3.9cm、器高9.4cm、7は床面から出土している小形のもので、色調は内、外面ともに暗茶褐色を呈し、小石粒を含む雑な胎土をもち、とくに内面はザラザラになっている。しかし底部だけはヘラできれいに整形されている。底径6.0cm。8～11、13は杯形土器、12は碗形土器である。8は床面から出土しており、内、外面ともに明茶褐色の色調を呈し、胴下部に稜をもち口唇部に向けてほぼ直に立ち上るもので緻密な胎土をもつものであった。口径11.3cm。9は胴中央部よりやや上に稜をもち、それから口縁部が大きく外半し、稜より下部は半球状になっている。内、外面ともにこまかく丁寧なヘラ磨きがされており、外面は暗褐色、内面は黒色の色調を呈す。口径14.2cm。10は稜をもたない半球状のもので、内弯しつつ口縁にいたっている。色調は外面の口縁部附近は黒赤褐色、他は茶褐色、内面は底部附近は黒赤褐色、他は黒色を呈している。外面の口縁部及び内面はこまかく丁寧なヘラ磨きがされている。外面の胴部はナデ整形であるが、がさついた感じの器面であり底部はヘラ削りされている。11も半球状のもので稜はなく内弯しながら口縁にいたる形状のものである。内外面ともに茶褐色を呈し、内面の一部は黒色である。外面の整形は弱いヘラ削りがなされ、内面は丁寧なヘラ磨が施されていて、外面底部はヘラ削りされている。10の口径13.3cm、器高約5cm、11の口径12.9cm、器高4.3cm。12は碗形土器で、底部は平底、胴部は内弯しつつ口縁にいたっている。外面茶褐色、内面黒褐色、一部黒色を呈し、口縁部の整形は内、外面ともに横ナデ、胴部は外面は丁寧なヘラナゼがされているが、内面は部分的に観察できる程度である。外面には指圧痕が多く認められる。口径14.7cm、器高5.5cm。13は高杯の杯部かと考えられるもので、強く外反しながら口縁部にいたる。ややがさついた胎土をもち、外面灰褐色、内面黒色の色調を呈し内面は丁寧な



第22図　第5号住居址出土遺物



第23図　第５号住居址出土遺物

ヘラナデが施されている。口径15.3cm

第25図―１は高杯の脚部であり、杯部は欠損している。ピット内出土のものであり脚部の外面淡赤褐色、内面は黒色、はかま部は灰赤褐色、杯部の外面淡赤褐色、内面黒色の色調を呈している。整形は脚部、内、外面ともにヘラ削りされており、はかま部外面ヘラ磨き、内面は横ナデされている。脚部の中ほどにふくらみをもっている。

須恵器の出土は少なく、破片が数点出土しているにすぎない。２は高杯の脚部と思われ、外面灰白色、内面青灰色を呈する精緻な胎土をもっている。

他にも土師器では甑の把手などが出土しており、甕形土器の胴部破片が多く出土している。出土量の多い住居址であった。

第６項　第６号住居址　（第24図）

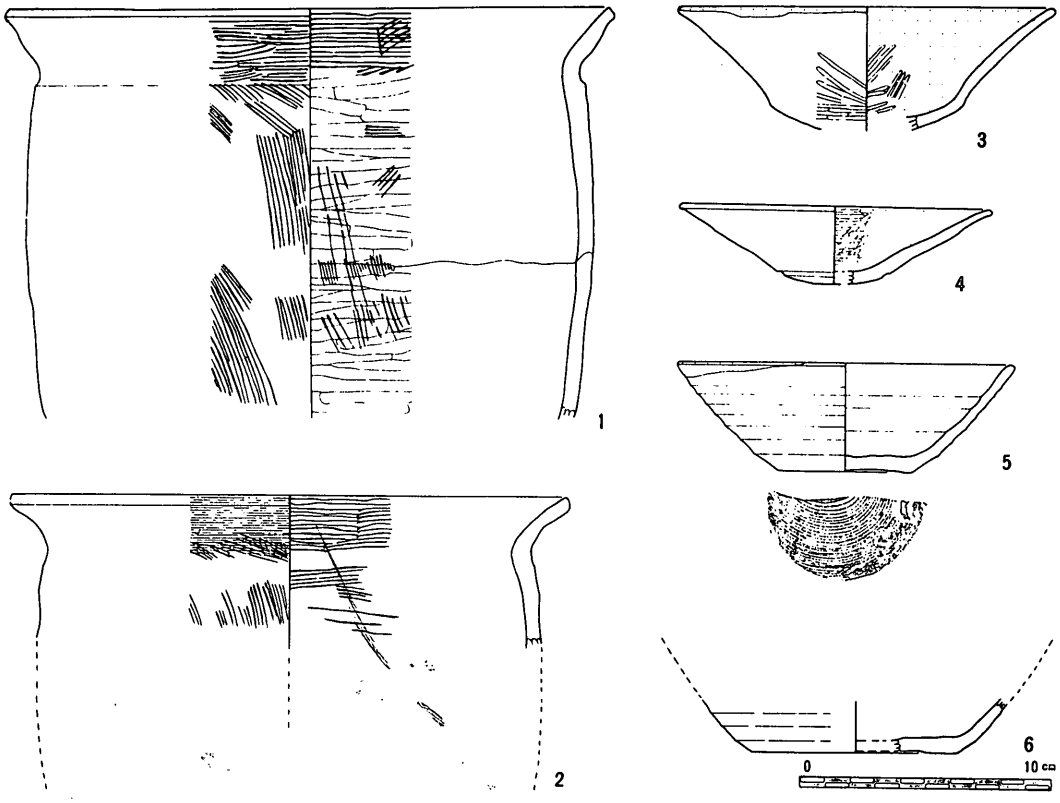
土師器と須恵器が出土しており、土師器では甕が多く、須恵器では杯、甕等の小破片が10数点出土している。１、２は甕形土器でありそれぞれカマドから出土している。色調は外面淡褐色、内面暗茶褐色を呈し、口縁部にふくらみをもち頸部は稜をもち長胴になるものと思われる。口縁部内、外面ともに櫛状の工具による整形がされ、胴部の外面も櫛状の工具によるやや荒いカキ目、内面はヘラによる横ナデ、部分的に櫛状の工具によるカキ目が施される。口径23.6cm、２は外面灰褐色、内面暗褐色の色調であり、雲母を多量に含む胎土をもっている。外面口縁部は横ナデ、頸部にカキ目のこまかい整形、胴部は弱いカキ目が、内面は口縁部から胴部にかけてカキ目が施されている。３、4は第５号住居址の混入遺物と考えられ、ともに床面ちかくから出土している高杯の杯部と思われる。３は底部近くに稜をもち大きく外反する口縁部をもち内面と外面の口唇部は黒色、外面は、淡褐色を呈し、内、外面ともにヘラによるナデ整形が部分的に施されている。口径14.9cm、４も３とほぼ同様な色調を呈しており、底部近くに一条の沈線がある。内面は黒色で丁寧なヘラ磨がされている。口径12.3cm。

５、６は須恵器の杯形土器である。５は内、外面ともに灰白色を呈し、胴部中央にややふくらみをもち、ロクロによる水引き痕の顕著なものである。外面の口唇部に黒色を呈する部分がある。底部は、糸切、口径13.4cm、底径5.4cm、器高4.2cm。６は内、外面ともに色調は青灰色を呈し５と同様にロクロによる水引き痕の顕著なものである。底部は糸切。底径約8.1cm。

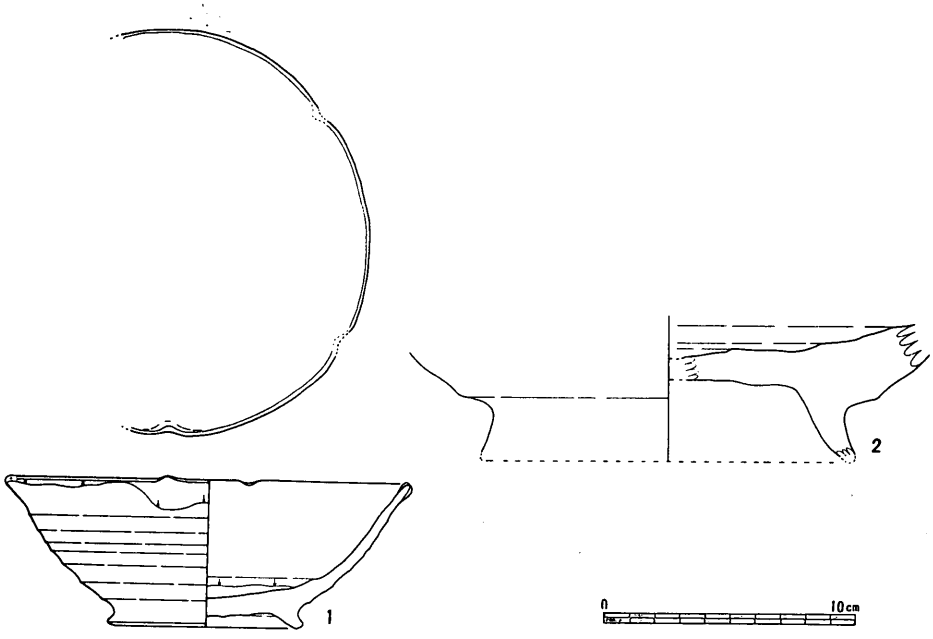
第７項　第７号住居址　（第25図）

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しているが、遺物の量はきわめて少ない。須恵器は覆土中に散見される程度であり、主体は土師器と灰釉陶器であった。

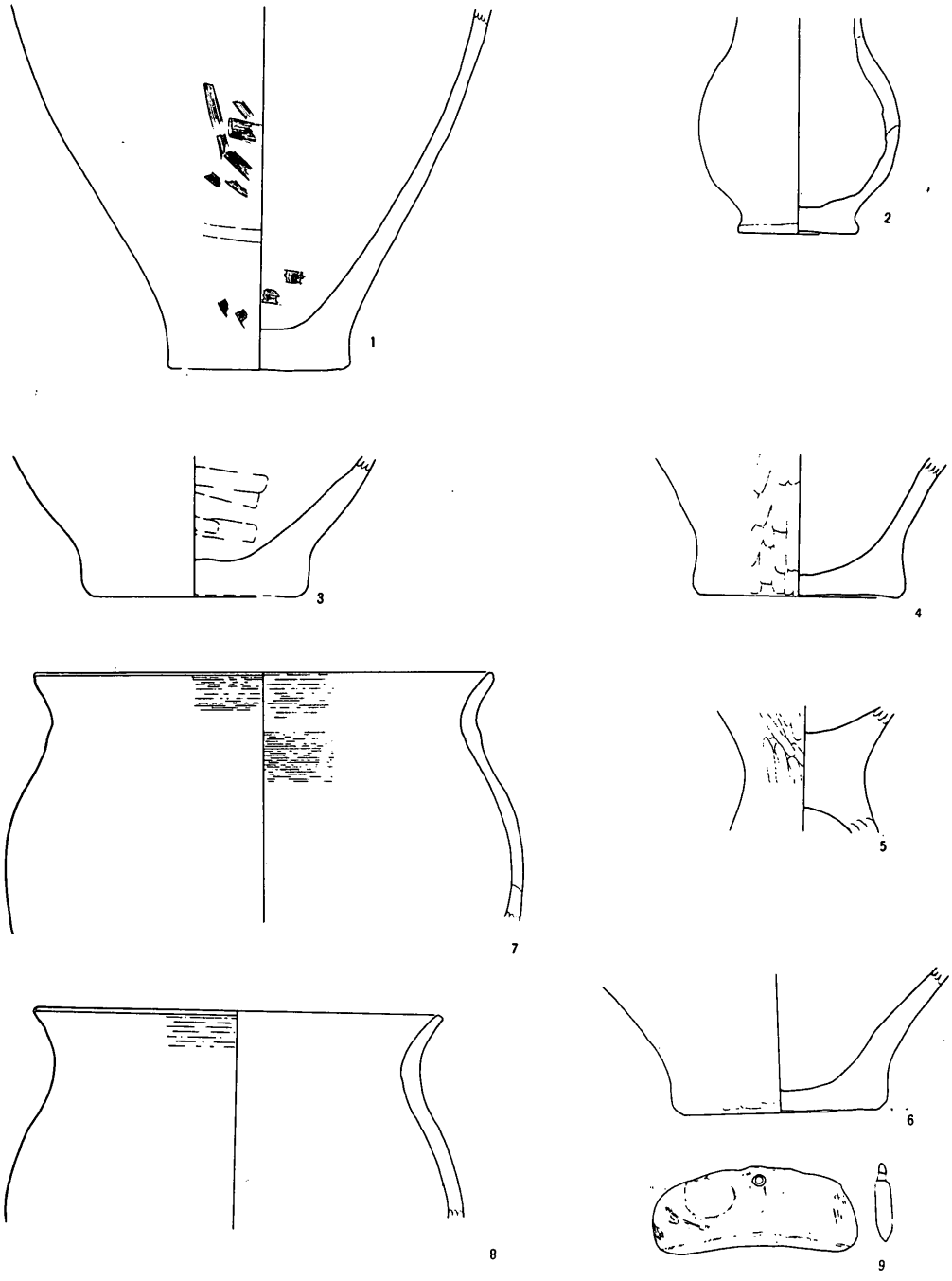
１は灰釉陶器の碗で、緻密な胎土をもっており、美濃産のものであろう。口径16.1cm、底径7.7cm、器高5.8cm、２は土師質の器の底部と思われ、つけ高台がついておりかなりの緻密な胎土をしており色調は淡赤褐色を呈し、かなり厚手のものである。ロクロによる水引き痕がある。



第24図　第６号住居址出土遺物



第25図　第７号住居址出土遺物



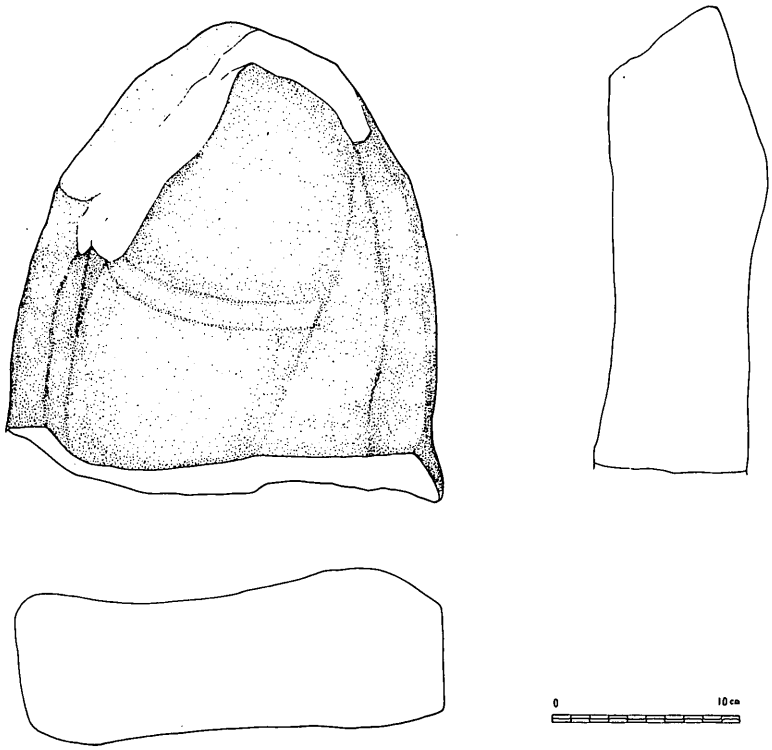
第26図 第8号住居址出土遺物

第8項 第8号住居址 (第26～27図)

第28図1、3、4、6～8は甕であり、1は炉に使用されていたものであり、ヘラによる整形がみえる。3、4とも外面や内面にヘラによる整形がみえ、6も同様である。7、8は口縁部附近であり口縁部には横ナデされている。2は小形の壺であり外面の調整は丁寧なものである。5は高杯

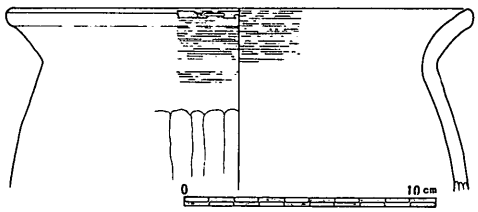
の脚部と思われ、外面の調整はヘラで丹念におこなっている。9は磨製の石包丁であり、短孔のもので、擦痕がいろいろな方向についている。第30図は安山岩製の石皿であり、両面に凹部をもっている。遺物の量は、それほどに多くはなく、ほとんどのものが床面直上に集中して出土しており、また石器の出土がほとんどなく、わずかに、石包丁と石皿が出土したにすぎなかった。

（田畑辰雄）



第27図　第8号住居址出土遺物

第2節　特殊遺構出土遺物



第28図　特殊遺構出土遺物

特殊遺構　（第19、28図）

土師器の甕が4～5個体分出土しており。覆土中からはほとんど出土していず、マウンド状になっている部分の中ほどから出土しており、焼土の下からの出土がいちばん多い。第21図―1は土師器の甕形土器であり、口縁部は内・外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面は横ナデがされている。口径15.4cm、第30図も土師器の甕形土器であり、口縁部の整形は内・外面ともに横ナデ、胴部は外面ヘラ削りの後にナデ整形されており、口唇がややふくらむ。第21図―1は頸部に稜をもっている。口径は18.5cm。須恵器等の出土はなにもなかった。

（田畑辰雄）

第Ⅲ章　ま　と　め

今回の調査では、弥生時代後期から平安時代に至るまでの住居址8軒、特殊遺構、それに配石址が検出された。ローム層までの深さはかなりあり、砂質黒褐色土層中に貼り床される遺構等もいくらかあり、かなりの遺構が未調査地区である東側と西側の地区に包蔵されているものと考えられる。また調査区内をみても単独の遺構は一つもなく、すべての遺構が切り合って存在していることでもうかがい知ることができる。なお予算、日数等の関係から調査区内全部の調査はできなかった。

弥生時代の住居址は2軒検出され、それぞれ埋甕炉をもち長方形の平面プランを呈するものであった。第8号住居址の主柱穴と考えられるピット4本のうち3本までが長円形のものであり、柱自体もこれに近い形のものが使用されているものと考えられ興味をひく資料である。またこのピットの中段もしくは中段から下場にかけて部分的に袋状をなす断面形をしており注意したい。住居址出土の遺物のありかたに注意をむけてみると、石器の量がきわめて少なく、また上伊那地方の同時期の住居址に目をむけてみてもやはり石器の量は比較的少ないのに気が付くのである。このように当期の上伊那地方における特有のありかたを2住居址ともに示しており、今後に検討を加えたい。なお調査地区の東側から南側にかけてに弥生時代の遺物は多く散布していた。2住居址ともに出土遺物等から座光寺原期に所属する時期のものである。

土師器を出土する住居址は全部で6軒あり、すべてカマドをもち、第5号住居址を除き他の住居址は東側の壁にカマドを構築してある。住居址の規模は第2号、5号を除きほぼ同じような規模をもっている。第5号住居址は時期が他の住居址よりずれるので後にまわし、第1、2、3、6、7号住居址についてまず検討を加えてみたい。これらの住居址はそれぞれ奈良時代から平安時代のあいだに存在したものであり、住居址の構築状態、カマドの形態などこれといって甚しく異なるものはなく、他の同期の遺跡で検出される遺構と同様の形態を示している。調査地区が小範囲であり検出検数も5軒であり、詳細な検討はむろんできるはずもないが、ここでは遺構の年代と出土遺物についてふれてみたい。

住居址の切り合い関係や出土遺物から考察して第6号→2号→3号→1号→7号という推移がなりたつと考えられる。ここでまず第2、6号住居址について述べてみたい。第2号住居址はその住居址の規模や柱穴等からみると本遺構のみならず他の同期の遺跡の住居址と比べても特異な存在である。8.84m×8.72mと同期のものでは他に類をみない大規模なもので主柱穴もはっきりしておりかなり目をひくものである。次に出土した遺物から第2号住居址についてみると土師器の甕、杯、皿、須恵器の杯、瓶、が出土しており、甕形土器は胴部ヘラ削りされ口唇部はやや丸味をもっている。杯形土器では内面黒色の胎土が厚手のものが伴い、高台付の皿形土器も伴出する。須恵器についてみると、蓋杯は端部が僅かに内折し器高は底いと考えられるものと、端部を急屈折させて器高は高くなると思われるものの二種類があるようで、杯形土器は水引き痕の上にナデ痕のある丁寧な調整をしており、口径に比して底形の大きいものがほとんどである。底部は糸切りのものばかりである。第6号住居址についてみると、土師器の甕形土器は頸部に弱い稜をもち粗いカキ目が施こされ口唇部は丸味をもたずに平坦に仕上げられている。須恵器の杯形土器についてみると、口径に比し

底径が狭く、大きく外反して口縁に至るもので底部は糸切りである。このように遺物を比較してみると第6号住居址の方が第2号住居址より古い様相を呈しており、第2号住居址は9世紀～10世紀代に、第6号住居址は8世紀から9世紀初めの時期におくことができよう。

次に第1号、3号、7号の各住居址であるが、第3号住居址は遺物も少なく、的確な時期の判断は下せないが、第1号住居址に切られるためにこれより古い時期のものであること、また第2号住居址を切っており、この2住居址の間に位置することは容易に判断できる。第1号住居址についてみると灰釉陶器が伴い、甕形土器はやや粗めのカキ目整形されるものと、小形の甕形土器ではロクロを使用する薄手のものが伴出しており、須恵器の出量が土師器にくらべて多めであり、供膳形態は須恵器を多用していたことがうかがえる。第7号住居址では灰釉陶器が須恵器にとってかわっており、土師器は全般に出土量が少ないため詳しくわからないが、内面黒色のものが多いようである。なお灰釉陶器は第1号住居址、K—90、第7号住居址、O—53の時期のものと考えられ生産地は東濃地方の古窯址群中に求めることができる。このような出土遺物からそれぞれの住居址の存在時期を推察すれば、第1号住居址は10世紀後半代から11世紀代にかけて、また第7号住居址は第1号住居址よりも新しく11世紀後半代から12世紀初頃の時期をあたえることができよう。

第5号住居址は今回の調査では1軒だけの古墳時代後期の住居址であるが、遺跡全体を調査すればかなりの数の住居址が検出されるであろう。出土遺物の土師器は鬼高II式の土器の持つ特徴を備えており当期に存在した住居址である。この住居址から須恵器の出土量はきわめて少なく、蓋杯、杯等は皆無といってもよいほどであり、今後の調査時に注意してみてゆきたい。

今回の調査で墨書土器が出土している。点数は1点のみであるが、本遺跡内では最も目をひく大規模な住居址である第2号住居址からの出土である。その字体はかなり軟らかい感じのするもので「六」という数字を1文字だけ書している。書かれている土器は県内の墨書土器でもいちばん数の多い内面黒色の黒色土器第II類と呼ばれるものである。数字を墨書している例は県内でもいくつか報告されてはいるが、3文字の中の1文字が数字であるとか、2文字のうち1文字とか、2文字が両方数字であるという例が多く、1文字だけ数字という例はあまりないようである。また当住居址出土遺物のなかには、硯あるいはそれにかわる転用硯等は出土していない。このように第2号住居址は当時期の集落を考えた場合にその中心的な役割をもつ住居址であろうことが推察されるわけであるが、広範囲の調査が不可能であったために深く考察を加えることはできなかった。

奈良時代から平安時代の住居址を調査するときにいつも困難をきわめるのは柱穴の検出である。今回の調査に関してみても主柱穴が4本確認された住居址は第2号住居址ただ1軒であり、他の住居址は主柱穴を確実に把握することはできなかった。このことは当遺跡のみならず他の同時代の遺跡についてみてもいうことができるのである。これは、家の建て方に大きく起因していると考えられ、住居址の規模にしてもそれほど大きいものはごくまれにみられる程度であり、技術の進歩等からピットを深く掘ることなく柱を立て上屋を保てたであろうし、また住居を構築するときに、その場所にある立ち木をその枝などを取り除き、それを1～2本利用して建てることも可能と考える。壁外にあるピット等も考慮にいれて考えてゆきたい問題である。

次に特殊遺構と配石址であるが、特殊遺構は竪穴状の遺構のなかにマウンド状のものがあり、その

第Ⅲ章　ま　と　め

マウンドの内部はかなり複雑な層序を示しており、またかなりの焼土が堆積しているが、窯とみるにはその焼土は少なく、またマウンド状の内部にも焼土が帯状はいっている。遺構の性格は判断できない。配石址はコの字型をしているものであり、すべての石が同一種類の石質（花崗岩）であることに注意したい。ともに奈良時代から平安時代にかけての時期に存在したものと考えている。

（田畑辰雄）

参考文献

伊那市教育委員会　浜弓場遺跡　1971年

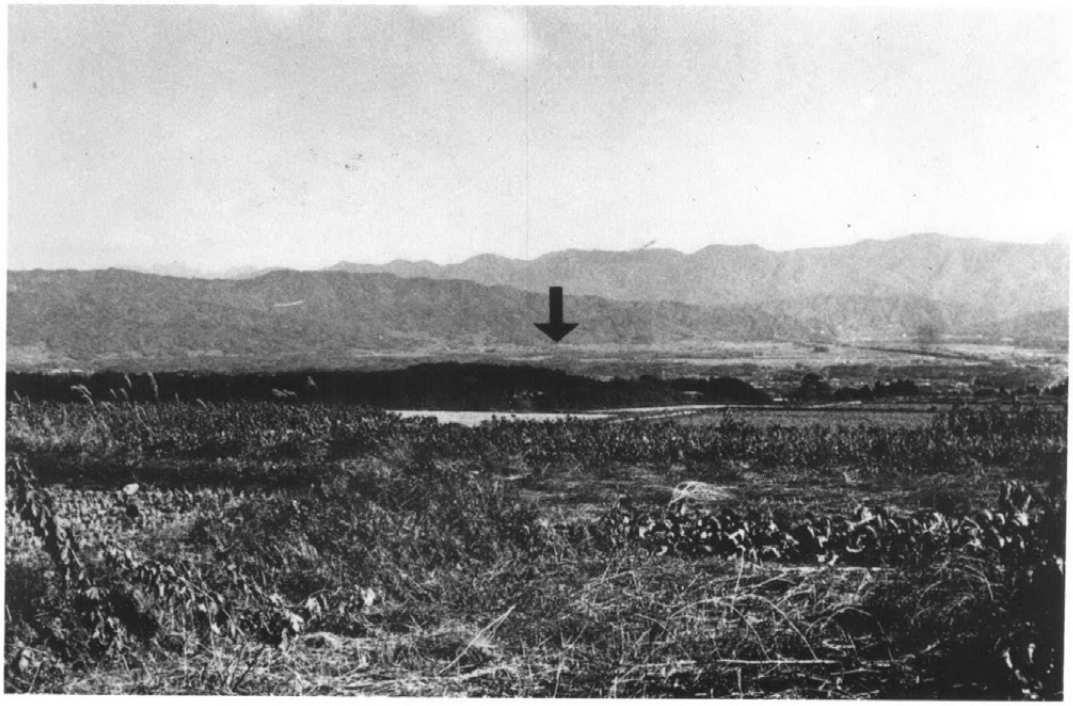
伴　信夫他　「長野県中央道埋文包蔵地発生調査報告書―箕輪町―」1973年

岡田正彦他　「同上　富士見町内その1」1973年

楢崎彰一　「猿投窯」（平凡社　陶器全集31　1966年）

同　「三釉縁釉灰釉」（平凡社　陶磁大系5）

図　　版



竜西地区より遺跡地を眺む

遺跡地を南側より眺む

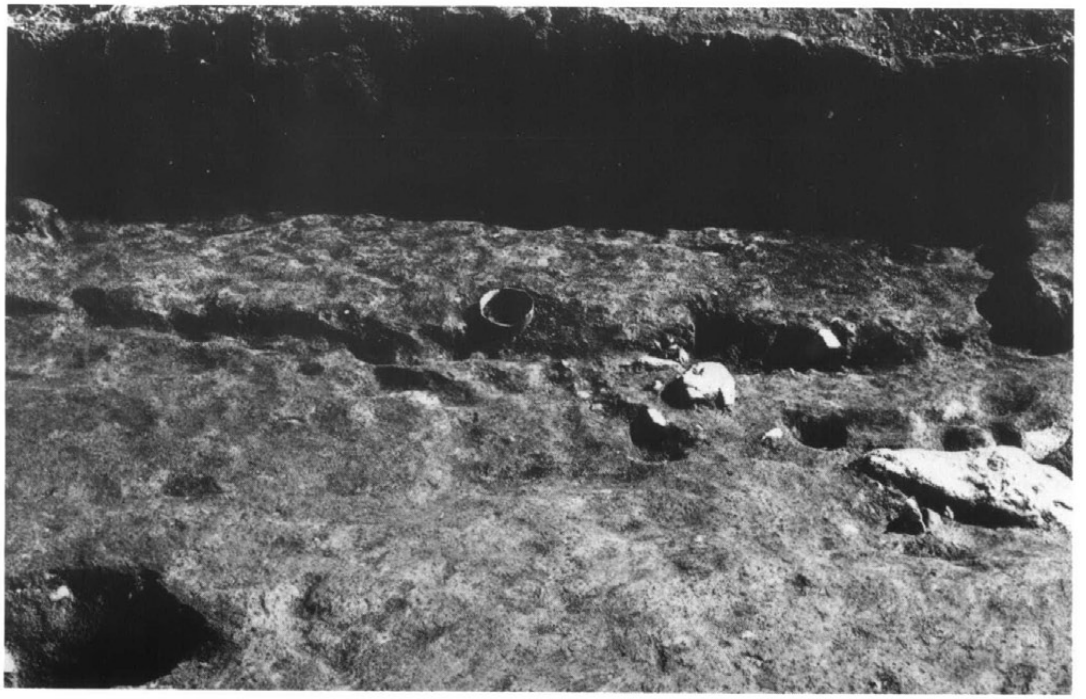
図版1　遺　跡　全　景

遺構配置（南側より眺む）

第１・３号住居址

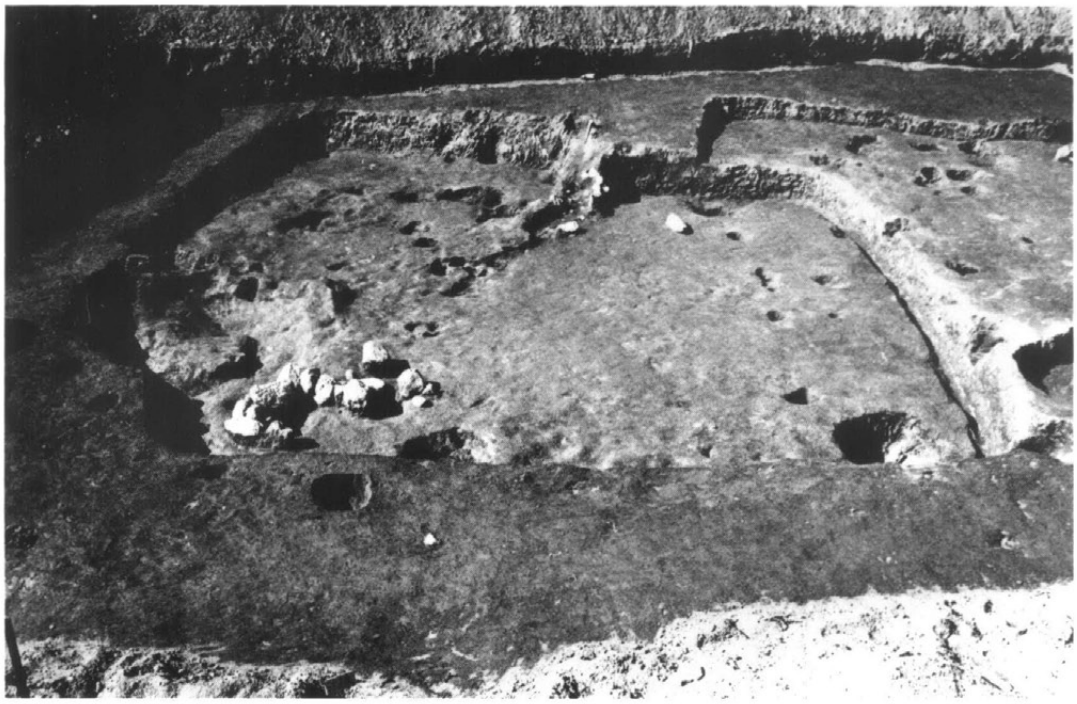
図版２　遺　　構

第 2 号住居址



第 4 号住居址

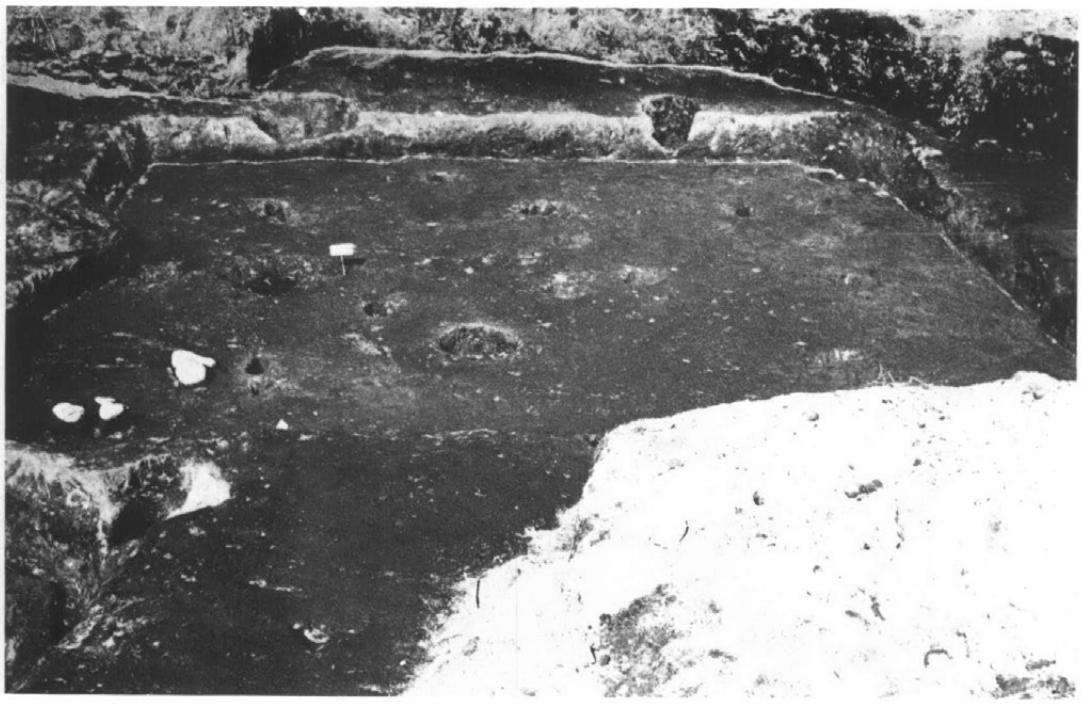
図版 3　遺　　構



第5・6号住居址、特殊遺構第1号配石址

第7号住居址

図版4　遺　　構



第８号住居址

第１号住居址カマド

図版５　遺　　構

第２号住居址カマド

第３号住居址カマド

図版６　遺　　構

第４号住居址埋甕炉

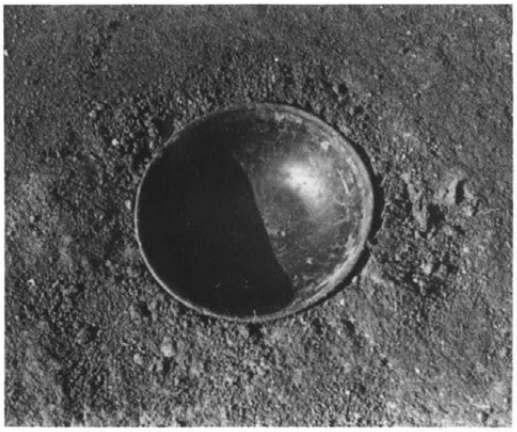
第５号住居址カマド

図版７　遺　　構

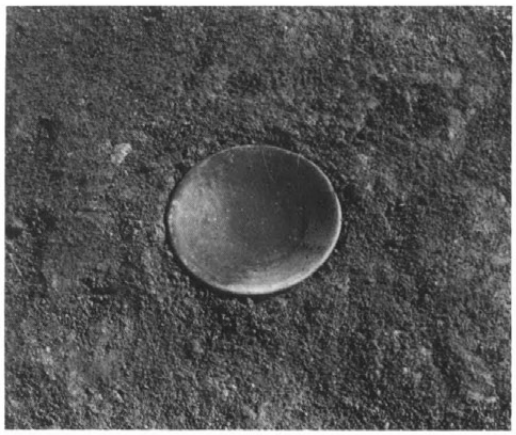
第７号住居址カマド

第８号住居址埋甕炉

図版８　遺　　構



遺物出土状況



遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

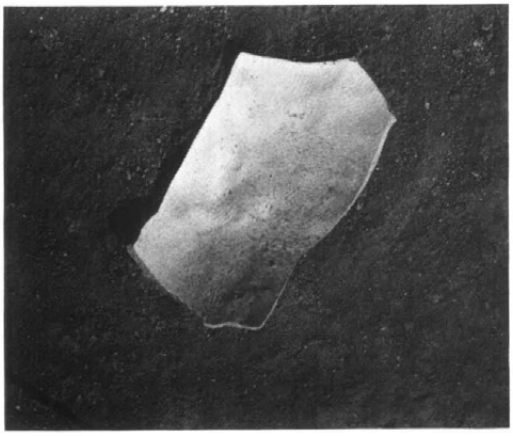
遺物出土状況

遺物出土状況

図版 9　遺物出土状況

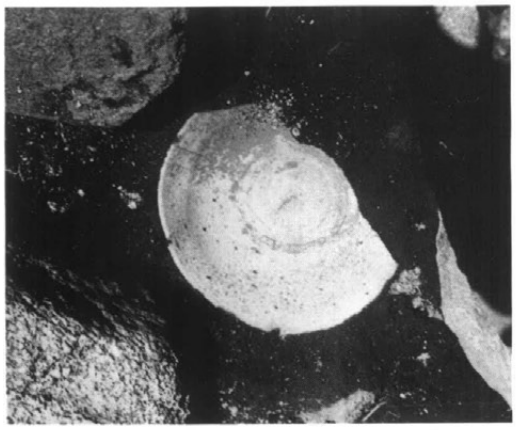
遺物出土状況

遺物出土状況

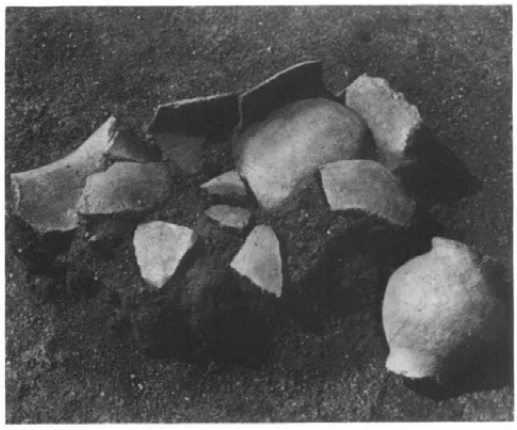


遺物出土状況

遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

図版10　遺物出土状況

砂 場 B 遺 跡

—緊急発掘調査報告—

昭和53年3月15日　印　刷
昭和53年3月20日　発　行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県伊那市旭町
㈾ 中 山 印 刷 所